

フリッツ・ハイダーの「物とメディア」について — 学術的な背景と「感覚質の主観性について」との関わりを踏まえて

Fritz Heider's "Thing and Medium":
Its intellectual backgrounds and relation to his thesis "On the Subjectivity of Sensory Qualities"

梅村 麦生

Mugio UMEMURA

1 はじめに

本稿は社会心理学者フリッツ・ハイダーの初期の論考「物とメディア」(Heider 1926)について、主に学術的背景とその後の受容の面から検討する。ハイダーは『対人関係の心理学』(Heider 1958a=1978)を著し、特に帰属理論とバランス理論の提唱者として知られていたが、社会学やメディア理論では近年、画期的な知覚メディア論を提起したのものとして「物とメディア」が注目されている。

ハイダーが社会心理学に及ぼした影響はほとんど『対人関係の心理学』によるもので、寡作かつ周囲に研究助手や博士大学院生のいない無名の研究機関・大学に勤めていたこともあり、アメリカ心理学の主流からは離れたところに位置していた(Weiner 2015: 751)。オーストリア時代に書かれた「物とメディア」がふたたび脚光を浴びようになるのは、まず『対人関係の心理学』刊行後にハイダー初期の諸論文が英語で「知覚、出来事構造、心理学的環境について」と題されて再公開され(Heider 1959a)、そこに「物とメディア」も含まれていたことによる。

その論集の編者ジョージ・S・クラインは

以下のように記している。

フリッツ・ハイダーの研究は遅ればせながら、賛同者の輪を着実に広げつつある。ハイダーの研究は長年にわたり、われわれの時代の最も重要な理論家たちのうち、クルト・コフカ、クルト・レヴィン、エゴン・ブンスヴィックといった著名な人々に対して重要な、控えめに言っても反響を及ぼしてきた。より最近でのハイダーの影響は知覚理論の中で、例えばジェームズ・ギブソンの研究の中に見出される。しかし依然として、ハイダーの諸著作は一般に知られていないとまでは言えない。(中略)この二つの著作[「物とメディア」と「知覚システムの遂行」]は、先に挙げた専門家たちによって知覚研究の古典と認められており、英語では本稿で初めて公開される。(Klein 1959: v-vi)

そして「物とメディア」ドイツ語版が2004年に再公開された際にも、その編者ディルク・ベッカーが編序で「これまでハイダーのこのテキスト[「物とメディア」]は、何度

も出版後まもなく忘れられてきた。新版の運命がそうではないことを願う」と記している (Baecker 2004: 20)。その後、今日まで依然として注目されている。まずは、より近年の社会学での受容について概観する。

2 社会学における「物とメディア」受容 — ニクラス・ルーマンのメディア概念

社会学でハイダーの「物とメディア」に注目したのが、ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンである。ルーマンは自身の社会システム理論の中で、タルコット・パーソンズのコミュニケーション・メディア論に触発されたメディア論を展開していたが (cf. Luhmann 1976)、後にハイダーの知覚メディア論を参照し、その構想から示唆を得て自身のメディア概念を発展させている¹⁾。以下で、ルーマンによるハイダーの知覚メディア論の応用を見ておく。

ルーマンはハイダーのメディア概念を、最終的には《メディア／形式の区別》というかたちに昇華させた²⁾。ルーマンによれば、知覚メディアとコミュニケーション・メディアを含めて、メディアは何らかの実体ではなく一つの形式であり、それはメディア基体／形式という、要素のルーズなカップリングとタイトなカップリングの区別とも言い換えられる組み合わせからなる。知覚メディアの例としては、光／画像、空気／音、言語については音／語、語／文、《象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア》の例としては、貨幣／価格、法／判決文、真理／理論などがある。ここでの含意は、何らかの作動の際には形式の側が貫徹性をもつ一方で、繰り返し利用される中で継続性をもつのはメディア基体の側であるという非対称性、つまりメディア基体と形式の差異そのものである (cf. Luhmann 1997a: 190 ff. = 2009: 209 以下; Luhmann 2005: 94 ff. = 2009: 111 以下)。

ルーマンがメディア／形式の区別を定式化する中で、ハイダーのメディア概念を最初に応用したのは芸術の領域である。ルーマンは「芸術というメディア」 (Luhmann 2001: 198 = 2016: 264-265) の中で、芸術作品をメディアとして扱う際に、知覚一般の領域から、象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア、さらに組織にまで応用可能なメディア概念を用いたとして、ハイダーの「物とメディア」 (Heider 1926) と、カール・E・ワイクの『組織化の社会心理学』 (Weick 1979 = 1997) のドイツ語訳版 (1985) を参照指示している。ここでルーマンはハイダー「物とメディア」のメディア概念から、メディア／物の区別を引き出し、それをメディア／形式の区別として応用している。そして芸術は知覚メディアに基づく芸術作品としてコミュニケーションされ、ジャンルの違いは知覚ごとのメディア／形式の差異 (例、音／音楽作品、視覚メディア／視覚芸術作品、文字／文学作品) によって形成されるとした (cf. Luhmann 1995: 173-179 = 2004: 175-182)。

ルーマンはさらに、メディアと形式の区別を、サイバネティクスや情報理論で用いられているとする《変異性 (variety)》と《冗長性 (redundancy)》、または《変異 (variable)》と《定常 (constant)》の区別に準えており、そうした区別が「今日的な、とりわけ帰属理論的な意義をもっているのは、ハイダー流の知覚心理学のおかげ」であると記している (Luhmann 1995: 167 = 2004: 555-556 (注4), 1997a: 196 = 2009: 717-718 (注12))³⁾。

ただしルーマンは、ハイダーが知覚の客観的な基礎 (cf. Heider 1926: 114) と考えていた、物とメディアの区別のいわば実体視について批判する。ハイダーは《メディア》が「外的に制約されている (außenbedingt)」のに対し《物》が「内的に制約されている」とした

が (ex. Heider 1926: 116), ルーマンはそうした内／外の区別自体が形式形成に依存しており, あくまで「システム理論からすれば〈中略〉メディアと形式はそのつどシステムにとって構成され」, 「メディア」は「個々の形式がもつ冗長性と変異性の関係においてのみ」示される, という点を強調している (Luhmann 1995: 166-167, 170-171=2004: 172-174)。

そしてルーマンは晩年の論考「宗教のメディア」の中で, メディア概念が指し示す特殊な差異として《メディア基体 (mediales Substrat)》とその《メディア基体の中で形成される形式 (Form)》との差異を挙げ (Luhmann 1997b: 306-307), この差異に基づくメディア概念の由来について以下のように注記している。

この枠組みは, (長らく忘れられていた) フリッツ・ハイダーによる知覚メディアの研究にまで遡る。フリッツ・ハイダー「物とメディア」(Heider 1926)を見よ。注目に値するのは, 後にハイダーがとりわけ因果性の知覚と帰属 (Attribution) とに興味をもち, あたかも因果性もまた, 特定の原因に対する特定の結果の帰責 (Zurechnung) によってのみ形式を獲得しうる, 膨大な組み合わせの可能性をもつ一つのメディアであるかのように見なしたことである。フリッツ・ハイダー「社会的知覚と現象的因果性」(Heider 1944)を見よ。(Luhmann 1997b: 306-307 (Anm.3))

ここで記されているように, 「物とメディア」における知覚メディアの議論は, 因果性の知覚ないし帰属という考え方と関わっている。さらにこの続きで, 「メディアと形式の関係についての一般的な理論は, ハイダーから始

まったというわけではなく, 重要な提起はワイクの『組織化の社会心理学』に見られるとしている (Luhmann 1997b: 306-307 (Anm.3))。ルーマン没後に刊行された『社会の宗教』でも, メディア基体と形式の差異を表すルースなカップリングとタイトなカップリングの区別は, 知覚メディアの例に即してハイダーが示唆したものであり, この区別は何より「物とメディア」の英語版 (Heider 1959a: 1-34) によって復活したと記し, 併せてやはりワイクの『組織化の社会心理学』を挙げている (Luhmann 2000: 20=2016: 16, 410 (注23))⁴⁾。この点に関して講義『社会理論入門』でも, 上述の区別はハイダーの物とメディアの区別に由来し, 当初は知覚メディアに限定されていたものが社会心理学と社会学へ応用される過程で (メディア論として) 一般化された, としている (Luhmann 2005: 94-95=2009: 112-113)⁵⁾。

したがって, ルーマンはワイクが言及していた「物とメディア」英語版を参照し, そこからドイツ語版に遡ったと思われるが, ハイダーの物とメディアの区別を, それを参照したワイクのルースなカップリングとタイトなカップリングの区別に結びつけ, 知覚メディアから意味, 言語, コミュニケーション・メディアにまたがる一般的なメディア概念としてシステム理論の下で発展させて用いている⁶⁾。

3 ハイダーの経歴と「物とメディア」

3-1 ハイダーの経歴

次に自伝や晩年のインタビュー等 (Heider 1980, 1983=1988, 1989; cf. American Psychological Association 1965) を参照し, ハイダーの略歴を見ておく⁷⁾。

ハイダーは1896年にオーストリアのウィーンにて, 歯科医を父にもつ建築技師の父モー

リッツ (Moritz Heider) と、ハンガリー系の医師を父にもつ母オイゲーニエ (Eugenie Heider, 旧姓 von Halaczy) のもとで生まれ、父の仕事の都合で1歳半でシュタイアーマルク州の州都グラーツに移住した。グラーツで1914年夏にギムナジウムを卒業し、父の薦めにしたがって初めは建築学を学ぶためグラーツ大学工学部に入学するが、やがて転じて法学や医学を学び、また1917年夏には叔父カール (Karl Heider) が教えていたインスブルック大学で動物学を、1918年春にはミュンヘン大学にてカール・ビューラーとシャルロッテ・ビューラー夫妻の講義で初めて心理学を学んでいる。やがてグラーツ大学に戻り、哲学と心理学を中心に学ぶようになる。ハイダーは特にアレクシウス・マイノングの下で心理学を学び、マイノングを指導教授、そしてもう一人の心理学教授フーゴ・シュピッツァーを副指導教授として学位論文「感覚質の主観性について」(Heider 1920) を提出し博士号を得た⁸⁾。

博士号の取得後、1921年にハイダーはベルリン大学で教授となった叔父カールと従姉ドリス (Doris Heider) を頼ってベルリンに移り、ベルリン大学の心理学研究室で聴講生となった。特にヴォルフガング・ケーラーとマックス・ヴェルトハイマーの講義を受け、さらにクルト・レヴィンの演習にも参加するようになった⁹⁾。中でもハイダーはレヴィンから多くのことを学んだと言い、渡米後も家族ぐるみで付き合いがあった¹⁰⁾。

1925年には一度グラーツに戻り、さらに長期でイタリア旅行に出かけている。その間によく心理学でキャリアを進めることを決心し、1926年にはベルリンに戻って学位論文後初めての論文として「物とメディア」(Heider 1926) を公刊することになる。

1927年春にはウィリアム・シュテルンの

助手として、ハンブルク大学の教育学部で心理学講義を担当することになる。ハイダーによれば当時他にグラーツで設立予定だったシュタイアーマルク州の心理技術研究所所長や、ウィーン大学のカール・ビューラーの助手というオファーがあったというが、新しい土地での挑戦と、さらにシュテルンの他にハインツ・ヴェルナーやエルンスト・カッシーラーといった著名な研究者がいる中で改めて心理学を学び直したいという気持ちからハンブルク行きを選んだという。ハンブルク大学では哲学科と心理学科が同じ教室を利用しており、ハイダーはカッシーラーの講義や演習にも参加している¹¹⁾。ハイダーはここで「知覚システムの遂行」(Heider 1930) を著した¹²⁾。

そして1930年にはシュテルンの紹介でクルト・コフカの招聘によって渡米し¹³⁾、マサチューセッツ州ノーザンプトンにあるクラーク・スクール聾学校研究部局 (Research Department of Clarke School for the Deaf) の心理学分野担当と、スミス・カレッジで心理学助教授を務めることになる。クラーク・スクールはかつてアレクサンダー・グラハム・ベルが理事長を務めたこともあり、ハイダー在籍時にもベルが考案した聴覚障害児のための口頭教育法が依然として影響を与えていたという¹⁴⁾。スミス・カレッジは当時アメリカ北東部でセブン・シスターズとして知られた女子大学7校の一つで、英文学者ウィリアム・アラン・ニールソンが学長を務めていた。ニールソンの学長在任中に立ち上げられた基金によって設けられた研究講座の「ニールソン講座」を最初に担ったのが、先のコフカであった。そしてコフカの同講座在職中にハイダーが彼のスタッフに加わることになった。またハイダーの妻となるグレース・ムーア (Grace Moore) もスミス・カレッジで修士課程を終えてコフカ研究室のメンバーとなっており、

二人は同年に結婚した。ハイダーはスミス・カレッジとクラーク・スクールに勤める間、主に聴覚障害児教育に関する研究を行い、グレースとも共同で論文を残している。知覚心理学の研究もその合間に継続し、「心理学理論における環境決定因」(Heider 1939)を著した¹⁵⁾。

その間に、ドイツでナチス政権が誕生したため、レヴィンは一時滞在中だったアメリカに残ってコーネル大学に移っていた。そのレヴィンがハイダーらに連絡し、後にトポロジー・グループと呼ばれることになる若手心理学者たちの研究会合が始まった。第一回の会合はコフカが場所を提供し、スミス・カレッジのコフカ研究室で開催された。この会合はやがてアメリカ心理学会(American Psychological Association, APA)大会の直前に開かれるようになり、第二次世界大戦期の一時中断を除き、レヴィン没後も1960年代まで続けられたという¹⁶⁾。

ハイダーは研究活動のうち、次第に対人関係の心理学に関心を移すようになり、スミス・カレッジでの活動が落ち着いた頃ようやくその研究を実行するようになった。その際にハイダーは当初、映像フィルムを用いて複数の図形を動かして被験者にその印象を尋ねる実験を行っており、まずスミス・カレッジの学生の一人と「見かけの動きについての実験的研究」(Heider and Simmel 1944)を共同で執筆し、さらにその成果に基づいて「社会的知覚と現象的因果性」(Heider 1944)と、理論的に発展させたものとして「態度と認知的体制化」(Heider 1946)を著した¹⁷⁾。

やがてハイダーは対人関係の心理学に関する本を執筆しようとするようになるが、第二次世界大戦が始まり、特にコフカが亡くなってから、スミス・カレッジとクラーク・スクールでの教育活動が忙しくなった。そこ

で休職し、当時ケーラーが理事の一人を務めていたグッゲンハイム財団の特別研究員となった(1947-48年)。さらに同時期に、トポロジー・グループの会合で旧知となっていたロジャー・バーカーがカンザス大学から心理学科長就任要請を受けており、その学科の設立に合わせてレヴィン・サークルの誰かをメンバーに加えたいとの考えからハイダーに声をかけた。1947年からハイダーは1966年の退職までカンザス大学で心理学科教授を務めることになる。

ハイダーは対人関係の著作に関して、まず複数の財団に相談したが「概念研究(conceptual research)」には助成できないと断られていた(Heider 1983a: 153=1988: 155-156)。そして一度目のグッゲンハイム財団特別研究員の時期にある程度書き上げているが、カンザス大学での業務が始まるとしばらく停滞することになる。そしてカンザス大学在職中にサバティカルをとって二度目のグッゲンハイム財団特別研究員(1951-52年)となり、またフォード財団行動科学部門から出版助成を得ることもできたが(1956-57年)、原稿を書き上げた後にも出版先が二転三転し、1958年によく『対人関係の心理学』(Heider 1958a=1978)として公刊された¹⁸⁾。この著作は心理学で幅広い反響を得て、特にハロルド・H・ケリー(Kelley 1960; cf. Kelley 1967, 1984)やエドワード・E・ジョーンズ(Jones and Davis 1965; cf. Jones et al. 1971)らの紹介により、バランス理論や帰属理論の提唱者として知られるようになった(cf. Harvey 1989: 571)。また『対人関係の心理学』刊行の翌年に、同書の出版にも携わったクラインの協力で、「物とメディア」と「知覚システムの遂行」の英訳ほか、ハイダー初期の著作を集めた英語論集「知覚、出来事構造、心理学的環境について」(Heider 1959a)が公刊された¹⁹⁾。同

年にアメリカ心理学会の分科会でもある社会問題心理学研究会 (The Society for the Psychological Study of Social Issues) からクルト・レヴィン記念賞を受賞している²⁰⁾。

その後、カンザス大学在職中の1960年にフルブライト特別研究員としてオスロ大学で客員教授を、1962-63年にデューク大学で客員教授を務め、1965年にはアメリカ心理学会から特別科学功労賞を受賞している (American Psychological Association 1965)。

しかし Malle and Ickes (2000: 11) にしたがえば、ハイダーの研究活動のピークはライフワークであった『対人関係の心理学』の刊行にあり、その後大きな反響を得てさまざまな大学で講義や講演を行ったり、研究者たちとの交流を続けていたりしたもの、実質的な研究論文や著書を残すことはなかった。著書としては他に自伝 (Heider 1983a=1988) があるのみである²¹⁾。その一方で、ハイダーは研究に関する細かなノートを晩年までとり続けていた (cf. Heider 1983a: 183-185=1988: 183-184)。そのノートについては、人類学者となってカリフォルニア大学ロサンゼルス校で教鞭を執っていた長男のカール (Karl Heider) の近くにハイダー夫妻が身を寄せていた際に知り合った心理学者のベルナルド・ワイナーとマリヤナ・ベネシュが興味をもち、後にベネシュ編で公刊された (Heider 1987-1990, Vol.1-6)²²⁾。

そしてハイダーは、ローレンスで92歳になる直前の1988年1月に亡くなった。ハイダー没後、グレースと次男のジョン (John Heider) の寄贈により、カンザス大学附属ケネス・スペンサー研究図書館 (Kenneth Spencer Research Library, University of Kansas Libraries) にハイダーの草稿や日記、蔵書などからなるフリッツ・ハイダー・コレクションが設けられている (Heider 2005)²³⁾。

3-2 ハイダーの経歴における「物とメディア」の位置づけ

以上の経歴を踏まえて、「物とメディア」が書かれた過程とその後の状況について、ふたたび主にハイダーの自伝からより詳しく見ていこう。

ハイダーはグラーツ大学での博士号取得後、ベルリン大学で聴講生として学んでいた頃に学位論文「感覚質の主観性について」(Heider 1920) で提起したアイデアを実行しようと考え、1922-23年に「物とメディア」の草稿を執筆した²⁴⁾。ハイダーによれば、もともと学位論文はマイノングの用語で書かれた部分と自然科学の用語で書かれた部分からなり、「物とメディア」では前者を放棄し後者を拡張したという。この論文の主な観点は、知覚を研究する上での環境条件の重要性、つまり「遠対象 (distant object) の知覚を可能にする環境条件」の意義であった (Heider 1983a: 48=1988: 48)。

この草稿をレヴィンに見せたところ彼が興味をもち、ハイダーは1923年春にエアランゲン哲学アカデミー (Philosophische Akademie zu Erlangen) の会合に招待され報告を行った²⁵⁾。その会合にはルドルフ・カルナップやハンス・ライヒェンバッハも参加していたという (Heider 1983a: 49-50=1988: 49-50)。そして1926年に『シンポジオン』誌 (*Symposion: Philosophische Zeitschrift für Forschung und Aussprache*) にて「物とメディア」を公刊した。この雑誌は、エアランゲン哲学アカデミー所属で博士の指導教授がシュテルンであった心理学者ヴィルヘルム・ベナリーが立ち上げたエアランゲン哲学アカデミー出版 (Verlag der philosophischen Akademie Erlangen) の最初の刊行物であり、ハイダーの論文は1巻2号に掲載された²⁶⁾。

ハイダーは数年かけてようやく公刊できた

この論文について、レヴィンによる励ましと助言に支えられたと自伝で記している (Heider 1983a: 49=1988: 49)。ハイダー・コレクションにはこの論文の校正稿と思われるものが残されているが、その原稿の末尾は「最後に私は、多くの価値ある助言をいただいたクルト・レヴィン氏に心から感謝したい」と締めくくられている (Heider 2005: Box 38, Folder 2: Ding J. Medium)²⁷⁾。

刊行後ほどなくして、ウィーン大学のカール・ビューラーや当時の彼の助手エゴン・ブルンスヴィックから反響があったという。ビューラーは早速「心理学の危機」(Bühler 1926: 518)の中で「物理学者に馴染みのある基礎についての注目すべき考察を、フリッツ・ハイダーは知覚の現象学・精神物理学 (Phänomenologie und Psychophysik der Wahrnehmungen) に応用している」として、「物とメディア」を参照指示している²⁸⁾。またハイダーはブルンスヴィックと1929年にウィーンで開かれたドイツ心理学会 (Deutsche Gesellschaft für Psychologie) の大会で初めて対面し、「物とメディア」が知覚についての新しい観点、ブルンスヴィック自身が後年「生態学的 (ecological)」な処理と呼んだものを提示したとして賞賛されたという (Heider 1983a: 90-91=1988: 92-93)。そのブルンスヴィックは『知覚と対象世界』(Brunswik 1934: 27, 82, 97, 102, 194)でハイダーの「物とメディア」と「知覚システムの遂行」を引用し、後年の『心理学の枠組み』²⁹⁾の中でも、ハイダーの「物とメディア」、「知覚システムの遂行」、「心理学理論の環境決定因」を取り上げ、特にサイバネティクスの知見が心理学にもたらした貢献を述べる段で「物とメディア」との関わりを示唆している (Brunswik 1952: 91-92=1974: 132-134)。ブルンスヴィックはそこでノーバート・ウィーナー以来のフィードバック

機構に関するサイバネティクスの議論や、クロード・E・シャノンとワレン・ウィーバーによる通信理論は、心理学が知覚や行動と環境との関わりを記述する概念を形成する上でも有用であるとして、特にシャノンとウィーバーの『通信の数学的理論』(Shannon and Weaver 1949=2009)から、(環境からの)《多義性 (equivocation)》を補正する手段としての(システムの)《冗長性》の議論を参照する中で、以下のように記している。

行動する有機体の環境がもつ因果構造の固有のもつれは、特殊な類型の「ノイズ」だと考えることができる。われわれはここでハイダーが、最小の干渉度で一種類の影響を受けやすい電磁場のような理想的な「メディア」と、それ自体で堅固な特性をもつ「物」とを対置させたことが思い起こされる。「物」が「メディア」に対して押しつけられると、通信理論の言う意味でのメッセージとなる。以上の場合に、メディアの構造的、統計的な特性から生じる望ましくない不確定性は、伝達されるメッセージを選択する上での自由度によって生じる望ましい不確定性と反比例の関係にある。

(Brunswik 1952: 91=1974: 132)。

上記引用箇所にも再掲された注記の中で、ブルンスヴィックは、『知覚と対象世界』(Brunswik 1934)で提示し、この著作でも展開している知覚や行動の生態学的なモデルを描く《レンズ・モデル》に関して、「レンズ・アナロジーの発展の基礎はフリッツ・ハイダーの二つの論文にあり、それが「物とメディア」と「知覚システムの遂行」であると記している (Brunswik 1952: 93 (note 20)=1974: 138-139 (注20))³⁰⁾。

しかし、レヴィンやビューラー、ブルンスヴィックなど一部を除いて、この論文が大きな反響を呼ぶには至らなかった (Heider 1983a: 132=1988: 138)。その点について、ハイダーはこう回顧している。

〔「物とメディア」で提示した〕そのような概念はこの間に情報理論やサイバネティクスによって発展されてきたが、1920年代には知られていなかった。その後、30年代になって私は自分の論文を物理学者に見せて援助を得ようとしたが、理解はまったく得られなかった。(Heider 1983a: 48=1988: 50)

情報理論は後に物理学者にも馴染みのものとなるが、ハイダーは1930年代にスミス・カレッジで同僚の物理学者に内容を伝えても理解されず、周りの心理学者たちからも何ら反応が得られなかったとしている (Heider 1983a: 132-133=1988: 138)。

なお、自伝上記引用箇所直前に書かれている「物とメディア」の説明は、同論文の英訳を収めた1959年の論集の著者まえがきの記述をほぼ踏襲している。ハイダーはそこですでに「〔「物とメディア」で示した構想に関しても〕近年、情報理論とサイバネティクスの発展によって精緻化された概念を用いる必要がある」と記し (Heider 1959a: ix)、こう続けていた。

しかしながら、私がこの論文を書いた当時は非専門家が物理学から支援を得ることは難しく、物理学者たちに意義を認めてもらおうという試みは成功しなかった。本論集でこの論文〔「物とメディア」〕を再掲するにあたり、私は未熟だった部分について謝らなければならない。そし

ていつかこの論文のアイデアを、より正確な言葉で表現することを望んでいる。(Heider 1959a: ix-x)

つまりハイダーは、自身の記述に不明瞭な部分があり、その後の情報理論やサイバネティクスの発展を踏まえば、より明晰な言語で表現し直すことができると考えていた。いずれにせよ、ブルンスヴィックの言及が影響を与えたかどうかはわからないが、1959年の時点でハイダー自身が「物とメディア」の内容をサイバネティクスや情報理論と結びつけるようになっていた。そして「公刊してから30年経ってようやく知られ始めたと思う」(Heider 1983a: 91=1988: 93) とするように、英訳版の公刊は「物とメディア」が再注目されるきっかけとなった。

さらにハイダーは1965年にアメリカ心理学会の特別功労賞を受賞した際に、スミス・カレッジ時代の同僚で当時同賞の審査員を務めていたジェームズ・J・ギブソンから、ハイダーが「知覚の基礎についての先駆的な思想」をもち、「はるか以前に、物と物による刺激との関係についてのパズルを示していた」と紹介されたことが特にうれしかったとして³¹⁾、「私は彼がこう述べたことで、少なくとも部分的には私の『物とメディア』における論点を認めていたことを意味すると思った。その論点とは、心理学にとって、知覚の『生態学的』な条件を考慮することが重要である、というものである」と記している (Heider 1983a: 182-183=1988: 182)。

「物とメディア」公刊後まもない時期に戻ると、ハンブルク時代に著した「知覚システムの遂行」(Heider 1930)では、「物とメディア」で提示した知覚における因果過程に関するアイデアを発展させている。自伝での回顧でハイダーは、この論文では「知覚過程に通

常含まれている、因果過程の四つの主な構成要素と私がみなしたもの〔遠刺激、近刺激、有機体内の過程、注意体験〕を記述しようと試みた〕としている(Heider 1983a: 88 = 1988: 90-91)³²⁾。この論文の序では、以下のように記していた。

〔中略〕知覚システムは当のシステムの遂行(Leistung)、つまりそのシステムの環境への適応の観点から考察することが重要であり、この観点は知覚システムの理論にとって有用である。要するに、この問題は知覚システムの遂行相(Leistungsaspekt [aspect of function]) (カール・ビューラー)にて示される。この方向性の出発点は、以前の研究(「物とメディア」[Heider 1926])で試みた。本稿ではよりわかりやすく、この思考から知覚心理学はいかなる利益を引き出しうるのかについて明らかにする。(Heider 1930: 371 = 1959: 35)

さらにスミス・カレッジに移ってから、聴覚障害児教育の研究を中心的に行う中で、他の心理学論考も残しており、「心理学理論における環境決定因」(Heider 1939)は「物とメディア」から10年を経て派生した研究の一つであるという。そこでは与件を体制化する方法の違いという観点から多くの心理学理論を検討し、その違いには近刺激と遠環境の間の区別が重要な役割を占めていた。特に自伝の時点でふり返ってみると、心理学理論における「帰属(attribution)」の役割について、つまり理論形成一般と帰属との関係にまつわる一連の問題について論じたものと考えられるという(Heider 1983a: 132 = 1988: 138)³³⁾。

そして「社会的知覚と現象的因果性」(Heider 1944)では、知覚研究の成果を対人

関係の研究へ応用した流れがよく示されている(cf. Ickes and Harvey 1978: 169)。ハイダーはここで「近年、知覚場(perceptual field)における体制化(organization)の過程について、数多くの研究がなされてきている。本稿では、それらの研究に含まれる諸原理は、他者の人格や行動の知覚にも適切に応用することができ、社会的な場の体制化の特徴の一つは、ある変化を何らかの知覚的な単位に帰属させること(attribution)である、と主張する」(Heider 1944: 358)と記し、さらに結論部ですでに『対人関係の心理学』に結実する知見の一端を示している。

環境における変化は、その変化が帰属される源泉から意味を獲得する。この因果的統合は、社会的な場の体制化において特に重要である。人格(persons)と行為(acts)から成り、そして知覚的な単位形成(perceptual unit formation)の諸法則に従う諸単位の形成は、この因果的統合に帰因する。類似性や近接性は、行為を人格に帰属させることを好む。そして確立された人格-行為単位(person-act units)は、諸部分の間の同化や対比をもたらす。人格内部の緊張は、この社会的・因果的な統合に影響を及ぼしうる。(Heider 1944: 372)

上記の引用部と合わせると、こうした構想が知覚研究から派生したものであることがうかがえる。『対人関係の心理学』に至ると、「帰属(attribution)」が「事物知覚(thing perception)」と「対人知覚(person perception)」に共通する問題として論じられるようになる(Heider 1958a: 56 = 1978: 68-69)³⁴⁾。

以上、「物とメディア」以後の展開まで見てきたが、ハイダーは自伝全編を通して時期

ごとにこの論考について言及していた。初期を除いて周囲から注目されず、渡米後には自身の関心も対人関係に移っているが、後年によりやうに再注目されていった様子が記されている。

3-3 ハイダーのノート集における「物とメディア」回顧

さらに、ハイダーが後年に書きためたノートにも「物とメディア」に関する記述が多く見られ、特に1978-1983年に書かれたノートに「物とメディア」を振り返った内容が記されている。ハイダーのノート集の編者ベネシュ＝ワイナーによれば、ハイダーは『対人関係の心理学』刊行後10年間は対人関係のアイデアを拡張することに努め、次の10年間は帰属とバランスに関する理論的な概念を、単位形成と秩序の知覚という、より包括的な文脈の中で磨くことに費やし、そして1978-1983年ごろには対象知覚の過程と社会的知覚の過程とに関するアイデアを統合し、より一般的な理論枠組みを構築するために「物とメディア」の再考へと戻っていったという (Benesh-Weiner 1990: xxviii)。自身のこうした関心と、その背景にある周囲での再評価の流れから、自伝を記述する上でも一つの軸として「物とメディア」に多く焦点が当てられたと考えられる³⁵⁾。

そしてハイダーのノート集では、この論考の系譜についても言及されている。まず目を引くのが、「物とメディア」が提示した知覚に関する「生態学的な見解 (ecological view)」とハイダーが呼ぶものの系譜である。「知覚についての生態学的な見解。その歴史」(1981年7月8日付)と題された項目で、「この見解は《遠刺激》の説明を行っている」として、冒頭に《志向性》のフランツ・ブレンターノを位置づけ (ただし、疑問符が付され

ている)、そこから左下にマイノングを経てハイダーに至る系譜と、右下に現象学者エドムント・フッサールを経て、色覚や触覚の心理学研究で知られるダーフィット・カッツと《地と図》の研究で知られるエドガー・ルビンに至る系譜を描いている (Heider 1988a: 128, § 330)³⁶⁾。

ハイダーはここで《生態学的》な見解という表現を用いているが、系譜の中身を見るとむしろ《現象学的心理学》といった言い方ができるかもしれない。現にハイダーの「物とメディア」はビューラーから「知覚の現象学」と言われており (Bühler 1926: 518)、カッツも「心理学的現象学」の主導者の一人と言われていた (MacLeod 1954: 1)。ハイダーは『対人関係の心理学』でも人々が対人関係で用いる《常識心理学 (common-sense psychology)》や《素朴心理学 (naïve psychology)》と呼ぶものから出発し、それに一般的な概念体系を与えて明瞭にすることを目的としていたように (Heider 1958a: 9=1978: 11)、「当事者たちが用いる意味の水準で対人関係を研究」 (Ickes and Harvey 1978: 166; cf. Malle and Ickes 2000: 6) することに努めており、ここにもある種の現象学的関心と言えるものが見出される³⁷⁾。他方で、ハイダーの言う《生態学的》を文字通りに受け取るならば、この表現を用いたブルンスヴィックやギブソン、バーカーらとの他の系譜を想定することができる³⁸⁾。

さらにハイダーはマイノングの対象理論との関わりについて、1978年以後に書かれた『「物とメディア」対マイノング』と題した項目でこう記している。

マイノングの対象 (object [Gegenstand]) と「物とメディア」の違い。「物とメディア」では物理的な対象や、物理的な対象と身体に触れる諸過程との関係が研究さ

れたのに対し、マイノングは思考の対象 (object of thought) を扱っている。

(Heider 1988a: 156, § 421)

ハイダーは自伝の中でも、次々と多くの「心的対象 (mental objects)」を見出していったとするマイノングの主張に対してブレンターノが投げかけた批判に同意し、ブレンターノが評したという「スコラ哲学の悪しき一面の復活」という言葉を紹介した上で、マイノングが掲げた「不可能対象 (impossible objects) の存在」に関する議論を言語の濫用や誤解に由来するものではないか、とまで述べていた (Heider 1983a: 21-22 = 1988: 21-22)。しかし、他の箇所では幾度も自身の思想に対するマイノングの影響を挙げているように、むしろハイダーはマイノングが思考の対象に即して論じたことを、知覚の領域に応用したと考えられる。また上記ノートが書かれる前のインタビューでも、こう答えていた。

[ハイダーが学んでいた当時の] グラーツには一人の偉大な哲学者で心理学者でもある人物がいました。その人物の名前はマイノングです。マイノングはフッサールと同じように、ブレンターノの学生でした。当時のマイノングはラッセル、G・E・ムーアらのイギリスの哲学者たちに大きな影響を与えています。〈中略〉

マイノングは実際に堂々とした人物であり、今になって私が常識心理学について発展させた考えのいくつかはマイノングに由来するものと気づくようになりました。しかし私がマイノングとともに学んでいた当時は、マイノングによる理論化がまったく好きではありませんでした。というのも、あまりにも論理的で乾いたものであったからです。(Heider 1976: 5-6)

以上からも、インタビューや自伝などの依頼を受ける中で、自身の研究活動を学史上に位置づける関心が高まり、マイノングの影響を再認識するようになったことがうかがえる。

またノート集には、「『物とメディア』の中心的なアイデア」として「われわれの行為や感情を決定するのに不可欠の諸変数は身体に触れておらず、われわれから離れた対応づけ (distal coordination)、つまり媒介の領域を横切る対応づけが存在している。そして媒介 (mediation) は、媒介という溪谷? の向こう岸にある物や出来事からのみ、その意味を獲得する」(Heider 1988a: 116, § 295) と記すなど、「物とメディア」についての記述を多く残している (cf. Heider 1988a: 115-117, 154-158, esp. § 294, 411, 425, 428)。

3-4 ハイダーの学術的背景に関する近年の評価

ベネシュ=ワイナーはノート集の編者まえがきで、ハイダーの知的な道のりの謎の一部は、20世紀転換期のオーストリア哲学、とりわけマイノングを介したブレンターノの作用心理学 (Aktpsychologie) というルーツにあると記していた (Benesh-Weiner 1990: xvii)。謎の一因はハイダーがそれまで自身の過去や学術的背景について語ってこなかったことにあると思われるが、インタビュー (Heider 1976, 1980, 1983b) や自伝 (Heider 1983a = 1988; cf. Duncan 1984; Kelley 1984) とノート集 (Heider 1987-1990) の刊行、さらに本人の死去を経て、ハイダーの学生や影響を受けた研究者を初めとして、ハイダーの研究を学史上に位置づけようという試みがなされるようになった。その中で、ハイダーの帰属理論や常識心理学の提唱者としての評価 (cf. Malle and Ickes 2000: 166; Reisenzein and Rudolph 2008; Malle 2011) や、ハイダー以後

への影響やその後の発展 (cf. Weary et al. 1980; Cartwright and Kelley 1987: xv-xix; Reizenzein and Rudolph 2008: 131; Weiner 2015: 752-754) に加えて、グラーツ時代のマイノング、ベルリン時代のゲシュタルト心理学やレヴィン、またハンプルク時代のカッシーラーとの関わり、さらにとりわけアメリカに移ってからの生態学的心理学との関わりや理論比較が行われるようになってきている (cf. Heft 2001: 203-233, esp. 225-232; Wolf 2004; Huber 2007: insb. 392-393; Reizenzein and Mchitarjan 2008; Rudolf and Reizenzein 2008; Mahr 2010a, 2010b; Schönplflug 2008; 柴田2012; Wieser 2014)。ハイダーの学術的背景としては、特にグラーツ大学での指導教授マイノングとの関わりが注目されている。

ハイダーの学生であったヴォルフガング・シェンプフルークは、「ハイダーの著作が熱心に受け入れられた一因は、心理学にとって出発点として役だった (が、それ以来放棄されていた) 哲学的なアイデアを彼が復活させたことにある」とした上で、マイノングやカッシーラーとの理論的な繋がりを示唆している (Schönplflug 2008: 134)。しかし他方で、因果帰属や素朴概念といったマイノングやカッシーラーのアイデアを受け継ぎながらも、ハイダー自身が主著や演習の中でその哲学的背景を明らかにしなかった点は驚きであるとしている (Schönplflug 2008: 139)。

ハイダーは晩年まで自身の学術的背景について語る機会が少なかったと思われるが、それ以前に主著が概念研究ということで複数の財団から助成を断られたり、草稿完成後も複数の出版社から公刊を見送られたと自伝で明かしていたように、1940-50年代当時のアメリカ心理学の行動主義的な雰囲気の中で、マイノングを初めとする哲学的背景を取り上げることで出版がより難しくなることを恐れて

いた可能性が指摘されている (Reizenzein and Mchitarjan 2008: 148)³⁹⁾。他方でハイダーは、グラーツ時代から一貫して実験研究よりも概念研究にこだわりを見せており、ケリーはハイダー自伝の書評でその傾向を指して、アルフレッド・J・マローがレヴィンの伝記に付した「実践的理論家 (practical theorist)」 (Marrow 1969=1972) という表題と対比させて、「非実践的理論家 (impractical theorist)」と評している (Kelley 1984: esp. 456)⁴⁰⁾。

またケリーは、ハイダー自伝の基調の一つが視覚的世界への関心であり、それは子供時代に当時の趣味として一般的だった絵描きをハイダーも好んだことに始まり、初期の論文につながったと述べている (Kelley 1984: 455)。ハイダーは父母の影響で幼い頃から絵描きを始め、大学に入るまで画家志望だったという (Heider 1976: 3-5, 1983a: 4=1988: 19, 1983b: 420)⁴¹⁾。初期にはカツの論考を受けて児童画に関する草稿も記しており、ノート集にも数多くのスケッチが残されている (cf. Heider 1987-1990)。

したがって「物とメディア」では論じられていないものの、ハイダー自身「感覚質の主観性について」で提起した視知覚の議論を芸術鑑賞の文脈で発展させる構想について、自伝で言及していた (Heider 1983a: 69 =1988: 69-70)⁴²⁾。ペーター・マールはハイダーのメディア概念をメディア美学の観点から検討しているが (Mahr 2010a, 2010b=2018)、そこでハイダーが「物とメディア」で扱った特定の観点がより詳しく論じられているものとして「感覚質の主観性について」を取り上げ、ハイダーのメディア概念には (1) 現象の基体としてのメディア、(2) フォーラムとしてのメディア、(3) 媒介過程としてのメディアの三種があると指摘している (Mahr 2010a: 57-61)。《現象の基体》としてのメディアとは、

ハイダーが《物》と対比したものであり、例として光波や音波が挙げられる。《フォーラム》としてのメディアとは、色や音といった感覚質が物や対象に対応づけられて現われる知覚の場を指すが、「物とメディア」ではこの概念が放棄されている。そして《媒介過程 (Vermittlung)》としてのメディアとは、視覚や聴覚、触覚といった知覚作用や、表現における人格の作用を指している⁴³⁾。

4 ハイダーの博士学位論文「感覚質の主観性について」

以上のとおり、ハイダーが知覚研究を始めるに際してはマイノングからの影響が大きく、「物とメディア」もその影響下で書かれた学位論文を部分的に発展させたものであった。

その博士学位論文は、前述の自伝によれば「第一の部分は私が当時よく精通していたマイノングの語彙を用い、マイノングの思想を発展させたものである。第二の部分は因果関係を扱う単純な自然科学の概念を用いたもの」であり、そこから「物とメディア」はマイノングの用語で書かれた第一の部分を放棄し、自然科学の用語で書かれた第二の部分を拡張させたものであったという (Heider 1983a: 37-38, 48 = 1988: 36, 48)。

「感覚質の主観性について」を執筆した経緯については、周囲が学位論文の研究を始めてい中でようやく自身も決意し、1919年ごろに知覚に関する研究がしたいとマイノングに相談に行ったとして、こう記している。

彼は私に著書の中の一つである『われわれの知識の経験的基礎について』 [Meinong 1906] というタイトルの本を紹介してくれた。私は直ちに買い求めて自室でそれを読み始めた。〈中略〉私は学位論文で、マイノングがこの本で提起

したパズルを解くよう試みた。その中の一つは単純な知覚の因果説 (causal theory of perception) を取り扱ったものである。この説は私たちが対象を見ることができるのは、その対象が私たちの眼に影響を与える過程を引き起こすからである、と主張している。それに対する反論として、マイノングは次のような疑問を出している。「太陽が光かがやいている下で一軒の家を眺めるとき、なぜ私はその家を見えるというのだろうか。なぜ、太陽を見えると言わないのだろうか。どう考えてみても、その過程を引き起こすのは太陽の光線である」。(Heider 1983a: 35-36 = 1988: 34-35)

ハイダーは「物とメディア」の「因果化と遠知覚」の節でも、『われわれの知識の経験的基礎について』を参照しているが (Heider 1926: 112), こうしたマイノングによる単純な知覚の因果説に対する反論に見出される知覚現象の《因果帰属》に関する意義は、後年になってようやく気づいたと記している。

このように、私はマイノングが提起したパズルを解こうとして、より広い環境の下での知覚の条件を考えるようになった。それを考えるうちに、私は「近」刺激 (proximal stimulus) と「遠」刺激 (distal stimulus) を区別するに至り、そのことによって最終的に、私たちが環境を理解しようとする際に因果帰属 (causal attributions) がもつ大きな意義に注目するようになった。実際のところ、私が60年前に研究していたときは当時の思想や雰囲気の中で没頭していたため、私のその後の考えにとってマイノングの提出した問いがいかに重要であったのかに

気づいたのは、ごく最近のことであった。
(Heider 1983a: 36-37 = 1988: 35-36)

インタビューの中でも、「いつ帰属 (attribution) という考えが生じたのかという特定の時期を上げることはできません。ただし、私の博士学位論文の中にすでに、帰属に関わるものが含まれています。もちろん帰属とは、知覚と密接に関わるものに他なりません」と答えている (Heider 1976: 12)。

ここで、この未公開の博士学位論文の構成を示しておく⁴⁴⁾。この論文は全5章で、第1章1節「転位可能性 (Übertragbarkeit)。疑似存在としての感覚質 (Sinnesqualitäten als Pseudoexistenzen)。研究の計画」に始まり、第2章「われわれはどのようにして多義性 (Mehrdeutigkeit) を主張するに至るのか」で問題が提示される。第3章「多義性の解明」で本論に入る。この章では8節「物とメディア (Ding und Medium)」で後の論考の表題が表れており、また13節「フォーラム (Forum) と現象の法則性 (Erscheinungsgesetzlichkeit)」や15節「傾性 (Disposition) という考えと外部世界」などを見ると、マイニング由来のフォーラムや傾性の概念が用いられていることがわかる⁴⁵⁾。第4章「感覚質の転位可能性」にて18節「三つの変数——フェノメノン、フォーラム、ヌーメノン」に記されている、同様にマイニング由来の概念組で議論が進められ、第5章「結論」が25節「第二の相対性 (zweite Relativität)」で結ばれている。

この論文の主題である「感覚質 (Sinnesqualitäten)」とは、特に色や音など、意識や知覚の中で感覚器官に与えられる性質のことを指し、その「主観性」とは、Heider (1920: 62) が引用するマックス・フリッシュアイゼン＝ケーラーの「感覚質の主観性説とその反対説」(Frischeisen-Köhler 1906: 1) がまとめ

ているように、「われわれが外部世界の物に対して特性として帰属 = 書き入れ (zuschreiben) する習慣にある、感官の感覚 (sinnliche Empfindungen) がもつリアリティとしての価値」、つまり「われわれの感覚的印象に客観的に対応するもの」はあるのかという問いに関わるものである。「感覚質の主観性」説は、そこで客観的に対応するものを否定しており、ハイダーはその説の妥当性を検討している。

冒頭から引用すると、

以下の研究は、感覚質の主観性についていくつかの論証と反証の意義を検討することを試みる。本稿では主観性を転位不可能性 (Nichtübertragbarkeit) として理解している。「転位可能性 (Übertragbarkeit)」という用語は、『われわれの知識の経験的基礎について』[Meinong 1906] に由来する。〈中略〉

そして本稿で扱う転位とは、フェノメナルな与件〔現象〕からヌーメナルなもの〔物自体、対象〕への転位を指している。〈中略〉本稿での感覚質は転位可能であるかという問いは、感覚質に対して存在 (Existenz) という性質を付与することができるか、ということの意味している。(Heider 1920: 1)

ここでは、何らかの意味で感覚質が存在すると言いうるかが問われている。ハイダーは「赤」という対象を把握する際に伴った体験、つまり表象内容が存在することは確かだとしても、その表象内容に対応する「赤」という対象が存在するかどうかは、なお疑われるべき一つの問題であると留保した上で、以下の例を挙げて現象の多義性に論を進めている。

普通の光の下で白く現われる一枚の紙

は、赤い光の下では赤く、青い光の下では青く見える。照明に応じて、一つの物も異なった色で現われる。そしてまた照明次第で、二つの「異なった色」の物も同じ色で現われる。赤い眼鏡をとおして見れば、一枚の白い紙も赤い紙と同じように現われる。

まったく異なるフェノメノンが、同じヌーメノンを参照することはできる。同じフェノメノンが、異なるヌーメノンを参照することもできる。こうした事態は、以下でフェノメノンの多義性について論じる際に考えられている。(Heider 1920: 4)

本文では以上の例に見られるフェノメノンの多義性、つまり現象と対象の間の帰属＝対応づけにおける多義性から、どのような仮説が導かれ、そしてその仮説が感覚質の主観性を証明するのか反証するのが検討されていく。

そして6節「物とメディア」で、マイノングから示唆された問いを挙げている⁴⁶⁾。

その問いは、『われわれの知識の経験的基礎について』[Meinong 1906]で提起された問いであり、以下のようなものである。認識作用が因果連鎖の内部で特定の一部分に関わり、先行する部分や後続する部分に関わらないのはなぜか。教会塔が知覚される時、知覚作用がまさに教会塔に関わり、教会塔から発する光波や、教会塔を照らしている太陽に関わらないのはなぜか。(Heider 1920: 22)

この問いからハイダーは、因果事象が帰属＝対応づけされる「基体 (Substrat)」として、「物 (Ding)」と「メディア (Medium)」を区分し、両者にはそれぞれ「傾性 (Disposition)」の面で根本的な違いがあると想定している

(Heider 1920: 22-24)。さらにハイダーは、フェノメナルなものとヌーメナルなものの帰属＝対応づけを攪乱する可能性があるものとして、フォーラムという考えを導入している (Heider 1920: 56-59)。上の例で言えば、色眼鏡や電灯に当る部分であり、フォーラムを介して同じフェノメノンが別のヌーメノンに帰属＝対応づけされる場合を示している。さらに内的なフォーラムとして、心的なフォーラムや生理学的なフォーラムという、感覚器官の側に属すると考えられるものも想定されている (Heider 1920: 47, 51-55)。以上を踏まえて、感覚質に関する三つの変数としてフェノメノン、フォーラム、ヌーメノンの三者を挙げて

いる。
この論文の結論では、以下のように記されている。

フォーラムによって作り出されるフェノメナルなものの多義性という事実からは、現象のある種の相対性が推論される。しかしそのことから、フェノメノンが相対的な値しか取らないことは決定的である、ということが示されているのではない。時にはフォーラムの影響がゼロに等しいこともありうる。

結論でわれわれが今いちど記しておきたいのは、フォーラムの影響がゼロに等しい場合でも感覚質の転位可能性はありうるが、絶対に転位されるというわけではまったくない、ということである。〈中略〉われわれが見てきたのは、感覚質の転位可能性についてはごく僅かなことしか言明できない、ということである。確実に言えるのは、そうした転位が少なくとも常に生じるわけではない、ということであると思われる。ただし、個別の事例において転位の可能性は常にあり続け

ている。(Heider 1920: 82-83)

ここでは感覚質の転位可能性が容易ではないことを示し、感覚質の主観性をより強調する内容になっていると考えられるが、「物とメディア」では知覚の「客観的」側面として、物とメディアの違いを論じることになる(Heider 1926: 109-110)。

5 おわりに

本稿では、ハイダーの「物とメディア」の受容と、この論考が書かれるに至った学術的背景について主に見てきた。この論考のもとになったのは博士学位論文「感覚質の主観性について」であり、その構想はマイノングの対象理論と、当時の知覚心理学と自然科学の議論から影響を受けていた。「物とメディア」はその研究からの派生として、ベルリン時代にレヴィンやゲシュタルト心理学者たちとの関わりの中で公刊された。当初はビューラーやブルンスヴィックらによって評価されていたが、その後ハイダー自身の関心の変化もあり忘れ去られていく。しかし『対人関係の心理学』刊行直後に「物とメディア」英訳版が公刊された折には、ブルンスヴィックによる言及もあってか、その内容をサイバネティクスや情報理論に沿って読み直す可能性が示唆された。ただし、その知見はすぐには広がらなかった。なおかつ、ハイダーはライフワークであった『対人関係の心理学』刊行以後、実質的な研究論文や著書を残すことなく、その議論を発展できなかった。しかしその後、ワイクによる注目や、それを受けたルーマンの参照を経て、社会学でもハイダーの議論がメディア論の文脈のもとで取り上げられるようになった。そうした再注目される中でハイダーも、インタビューや自伝の中で「物とメ

ディア」に盛んに言及するようになる。同時に晩年には当該テーマおよびハイダー自身の知覚研究から対人関係の研究に通底するアイデアをノートに書き記しており、未完の構想として残されている。

ハイダー初期の研究に対してその知的背景であるマイノングの諸理論や、同時代の知覚心理学や自然科学からの影響がより詳細にどのようなものであったのか、さらに後年になって再注目され、他の研究者からも応用される中で、どのような部分が継続され、他方で新たな知見に置き換えられているのかについて、加えて、ハイダー自身の晩年の構想を含めて、またブルンスヴィックやワイク、ルーマンが行っているようなサイバネティクスや情報理論と接続するかたちに示されているように、「物とメディア」の議論が知覚メディア論としてどのような発展の可能性があるのかについては、今後さらに検討される余地がある。

注

- 1) ルーマンは「物とメディア」に注目する前から、行為の《因果帰属＝帰責 *kausale Zurechnung*》に関連づけて、社会心理学の帰属理論を参照していた。ハイダー以外にハロルド・H・ケリーやエドワード・E・ジョーンズらの文献も参照しており、法学や国民経済学などの社会科学における帰属＝帰責概念との関わりにも言及している (cf. Luhmann 1965: 65-66 = 1989: 96, 130, 1978: 241, 251-252 (Anm.19-22), 1984: 308 = 1993: 359, 411 (注32))。またルーマンは「公務員における昇進の帰属」(Luhmann 1973)で、ハイダーやジョーンズらの社会心理学の帰属モデルを応用し、昇進の帰属に関するドイツの公務員へのアンケート調査に基づいた研究を行っている (cf. Luhmann und Mayntz 1973)。
- 2) ジョージ・スペンサー＝ブラウンに由来する《二側面によって区別されたものとしての形式》という形式概念については、Luhmann (1997a: 60 = 2009: 53) を参照。
- 3) 後述のように、ハイダー「物とメディア」の

- 構想をサイバネティクスの諸概念と対比する試みは、エゴン・ブルンスヴィックがすでに行っている。ルーマンはブルンスヴィックについて、『社会の社会』でDonald・T・キャンベル (cf. Campbell 1966) を介して言及している (Luhmann 1997a: 192, 554-555=2009: 715 (注2), 818 (注250))。
- 4) 「カップリング」については、『社会システム理論』の時点でワイクの「ルースにカップリングされたシステムとしての教育組織」(Weick 1976) を参照指示している (Luhmann 1984: 302 = 1993: 352, 413 (注19))。
 - 5) 同講義録の編者ベッカーはこの箇所の編注でルーマンの「認識としての構成」を文献指示している。特にLuhmann (1988: 35-36, 54 (Anm. 22) = 1996: 242-245, 255 (注22)) を参照。
 - 6) ベッカーも「物とメディア」新版の編注で「この論文はおそらく、特異な構想への嗅覚で知られる社会心理学者・組織心理学者のカール・E・ワイクが『組織化の社会心理学』[Weick 1979=1997]の傍注で取り上げなければ、今日まで忘れ去られていただろう。〈中略〉この注には社会学者ニクラス・ルーマンも注目しており、ハイダーのこの論文をより厳密に検討しその理論的射程の広さを認めている。今日ではこの論文は、システム論的・メディア論的な概念研究からも、もはや無視できないものとなっている」と記している (Baecker 2004: 11-12)。
 - 7) ハイダーの経歴と自伝に関して、Ickes and Harvey (1978), Harvey (1989), Malle and Ickes (2000), Görlitz (2004), Weiner (2015) も参照。またハイダーやレヴィンを含む、ゲシュタルト学派を中心にドイツ語圏からアメリカへ移住・亡命した心理学者たちに関して、Mandler and Mandler (1969=1973) も参照。現時点で筆者が確認できたハイダー著文献については、本稿文献リストのハイダー箇所を参照 (cf. American Psychological Association 1965: 1083-1084; Heider 1989: 154, 2005: Box 23, Folder 30: List of Publications by Heider)。
 - 8) マイノングを中心とするグラーツ学派の心理学者については、Huber (2007) を参照。ハイダー在学時にはヴィットーリオ・ベヌッシがグラーツ大学の心理学研究室で助手を勤めており、知覚心理学の実験を多く行っていた。ベヌッシはハイダーにもたびたび助言を与えており、彼がパドヴァ大学に移ってからもしばらく交流があった (cf. Heider 2005: Box 27, Folder 12: Letters, Postcards, Report Card 1921; Heider 1983a: 23, 62 = 1988: 23, 62)。
 - 9) ベルリン大学で聴講生をしていた1921-1922年の受講許可証がHeider (2005: Box 27, Folder 12: Letters, Postcards, Report Card 1921) にあり、そこにはヴェルトハイマーの「実験心理学演習」(*Experiment. psycholog. Übungen*) とケーラーの「自然哲学演習」(*Naturphil. Übungen*) の記載がある。
 - 10) ハイダーは妻グレースとの共同でレヴィンの『トポロジー心理学』を英訳している (Lewin 1936; cf. Heider 1983a: 123=1988: 128-129)。
 - 11) 後年のインタビューでハイダーはシュテルンから受けた影響について聞かれ、最も重要だと考えたのは《人格 (Person)》の概念であると答えている (Heider 1980: 16; cf. Heider 1983a: 84-85=1988: 82)。またハイダーはカッシーラーの思想に触れたことで、マイノングの位置づけや、カッシーラーの影響を受けたレヴィンの理論の位置づけについて改めて考えることができたと言っている (Heider 1983a: 82-83=1988: 85-86; cf. Heider 1980: 15)。
 - 12) ハンブルク時代の活動として、自伝では1928年春にレヴィンやハイダーの声がけでハンブルク大学からハイダーやヴェルナー、ベルリン大学からレヴィン、ヴェルトハイマーとケーラー、さらにダーフィット・カツツ、アルベール・ミショット、エドガー・ルビンといった心理学者たちがロストックで集まった会合についても記している (Heider 1983a: 88-93=1988: 91-95)。
 - 13) ハイダーによれば、シュテルンがコフカからのオファーを紹介したのはカッシーラーのハンブルク大学学長就任祝賀会の夜であり、先にヴェルナーが断ったためその祝賀会の席でハイダーに話が回ってきたという (Heider 1983a: 94 = 1988: 96-97)。
 - 14) ベルが創設したアメリカ聴覚障害児発話教育促進協会 (American Association to Promote the Teaching of Speech to the Deaf) が発行していた雑誌が『ボルタ・レビュー』(*Volta Review: An Illustrated Monthly of Facts*) であり、ハイダー夫妻も聴覚障害児教育の実践者の会合で行った研

- 究報告などを公刊している (Heider 1983a: 131-132=1988: 137)。注 (15) も参照。
- 15) ハイダー夫妻の聴覚障害児教育に関する研究については, Heider (1934, 1943), Heider and Heider (1935, 1940, 1941a-d, 1943a-d), Heider, Heider and Sykes (1941) を参照。また知覚研究の一環として, ヴォルフガング・メッツガーの視知覚研究に関する書評 (Heider 1932) と, スミス・カレッジの学内報で「驚きと多義性」 (Heider 1942) を公刊している。
- 16) 初回の会合には他に, デューク大学から, ベルリン大学でレヴィンと共に学んだドナルド・アダムスとカール・ツェナー, さらにレヴィンの学生だったタマラ・デンボ, ゲニア・ハンフマンとドン・マッキノン, そしてコフカとスミス・カレッジの心理学研究室のメンバーが参加したという。この会合にはレヴィンと関わりのなかった人々も呼ばれるようになり, 自伝ではマーガレット・ミードとグレゴリー・ベイトソンが招待された1940年の会合についても記している (Heider 1983a: 121-122=1988: 126-128)。トポロジー・グループの会合については, Marrow (1969: 111-115=1972: 192-200) も参照。
- 17) 後年, この実験を発展させた研究を Heider (1967) で公刊している。また当初のフィルム実験も, 近年再現映像が作られるなど再び注目を集めている (cf. Lück 2006; Gordon and Roemmele 2014)。ちなみに, その最初の実験論文の共著者で当時ハイダーの学生であったリアンネ・ジンメル (Marianne Leonore Simmel, 1923-2010) は, 後に認知心理学者として幻肢研究の分野で成果を残すこととなるが, もともとドイツのイェナ出身で, ナチス時代に父で医師のハンス・ジンメル (その父が哲学者・社会学者のゲオルク・ジンメル) がダッハウの強制収容所に収容されたことと前後して, 1938年に母で医師のエルゼ・ジンメルや兄弟とイギリスへ亡命し, 1940年にアメリカへ渡りスミス・カレッジで学ぶこととなった。ハンスも1939年に解放されスイスへ逃れ, 1940年にイギリスに移り家族と共にアメリカへ渡っているが, 1943年に亡くなっている (cf. Ruess 2009: 341-344; Kaesler 2010; Golomb 2012)。
- 18) ハイダーは自伝で, 『対人関係の心理学』がある出版社から刊行を断られたとき, 後にその理由を聞くと「[同書の内容が] 常識以外の何ものでもない」とのことだったと記している (Heider 1983a: 173=1988: 174)。その後クラインからウィリー社を提案されたという。グッゲンハイム財団とフォード財団からの助成に関しては, 『対人関係の心理学』謝辞を参照 (Heider 1958a: v-vi=1978: iii-iv)。
- 19) この論集には, 「物とメディア」と「知覚システムの遂行」の英訳に加えて, Heider (1939, 1941, [1959] 1960a) と書き下ろしの「知覚における経済的記述の機能」 (Heider 1959b) が採録されている。
- 20) その際の受賞講演が Heider ([1959] 1960a) である。他に『対人関係の心理学』刊前夜の学会報告や書評として, Heider (1947, 1955, 1957, 1958b, 1958c, 1960c, 1960b, 1960d, 1960e, 1962, 1964) がある。
- 21) 晩年は自身の研究を振り返る機会が多くなり, シンポジウム等で講演を行ったり (Heider 1970, [1975] 1979, [1977] 1978b; cf. Weary et al. 1980), 帰属理論や社会心理学の論集向けに複数のインタビューに答えている (Heider 1976, 1980, 1983b)。加えて, 心理学系事典にバランス理論項目を執筆している (Heider 1977)。また1983年刊の自伝のもとになったのは, 刊行は前後するがガードナー・リンジー編『自伝に見る心理学史』シリーズ中の1章として書かれたものであった (Heider 1989)。
- 22) ハイダーのノート集の刊行について, 編者ベネシュ＝ワイナーは第一巻の編者まえがきの中で, 彼女が1979年夏にパロ・アルトの先端行動科学研究所 (Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences) に奨学生として来ていたときから8年越しのプロジェクトだったと記している (Benesh-Weiner 1987: xxxvii; cf. Benesh and Weiner 1982; Marijana Benesh-Weiner to Grace Heider, "How Fritz's notebooks came to be published," in: Heider 2005: Box 38, Folder 19: Articles on Fritz Heider's Notebooks and Letters about the Notebooks)。
- 23) 同図書館には, 1995年没のグレースの書簡や草稿からなるグレース・ハイダー・コレクション (Heider, G. M. 2011) もジョン・ハイダーからの寄贈により設けられている。
- 24) Heider (2005: Box 38, Folder 30) に「物とメ

- ディア」の手書き草稿と思われるものと、「物とメディア」の個別の節に相当する内容のタイプ原稿も含まれている。
- 25) 自伝ではThe Philosophical Society (ドイツ語訳版Philosophische Gesellschaft) とあるが、『シンポジオン』誌とのつながりからエアランゲン哲学アカデミーを指していると考えられる。Lehmann (2002: 555-556) と Court (2003: 311) によれば、同アカデミーはエアランゲンの私講師ロルフ・ホフマンがカント協会 (Kant Gesellschaft) のフランケン支部と共同で1922年に設立したもので、理事にはエルンスト・トレルチ、ルドルフ・オイケン、パウル・ナトルプ、ハインリッヒ・リッケルト、カッシーラー、ベネデット・クローチェ、ジョン・デューイ、バートランド・ラッセルが名を連ねている。しかし、同アカデミー所有の建物が1924年に崩壊し (cf. Heider 1983a: 50=1988: 48), ホフマンが1925年に渡米したことにより、早くも1925年8月に解散している。しかもホフマンは1919年にバウハウスの創立者ヴァルター・グロピウスにこの協会のために会館の新築を依頼していたが、結局実現せずに終わった。
- 26) 『シンポジオン』誌については、Court (2003: 311-312), Court und Janssen (2003: 18-19) を参照。当誌の編者にはベナリーのほかカッシーラーらが名を連ねているが、1925年から1927年で刊行が終わっている。
- 27) ハイダー・コレクションの当該フォルダーにはタイプ原稿2部が所蔵されており、1部は編集部へ返送したもので、もう1部は修正前原稿を複写したものと思われる。前者には誤字・脱字の修正が青字で記入されている。またレヴィンへの謝辞と最終ページの目次が上から消されており、公刊された完成稿にはどちらも記載されていない (Heider 2005: Box 38, Folder 2: Ding J. Medium)。
- 28) ビューラーは留保として、この引用箇所の直後で「ハイダーは残念ながら、コフカ流の構造一元論の把握が特定の地点でどのように窮地に陥り、二者択一の前に立たされたのかについて、明示的に述べていない。ハイダーはただ暗黙裏に従来どおりのやり方で、脳の神経的・終局的事実と、現象的知覚構造との間の精神物理学的な相関を、構造化されていない諸感覚とい
- う中間項によって作りだして」おり、ある種の唯物論的なパラドクスに巻き込まれているとしている (Bühler 1926: 517-518)。
- 29) 『心理学の枠組み』(Brunswik 1952=1974) は、オットー・ノイラートの主導で創刊された『国際統一科学エンサイクロペディア』(*International Encyclopedia of Unified Science*, 1938-1969; cf. Neurath 1937: esp. 271-273; Reisch 1996) シリーズの第1巻10号として刊行された。
- 30) ハイダーも『対人関係の心理学』の「媒介過程」や「人称的因果性と非人称的因果性」の項などで、『知覚と対象世界』や『心理学の枠組み』ほかブルンスヴィックの諸研究を参照している (Heider 1958a: 35-44, 100-109=1978: 44-50, 125-136)。後者の項は、ブルンスヴィック没後に公刊された記念論集 (Hammond ed. 1966) に再録されている (Heider 1966)。ただしハイダーは、ブルンスヴィックの見解には必ずしも同意しておらず、特に論理実証主義の初期に見られる形式主義の残存を批判している (Heider 1983a: 132=1988: 138; cf. Heider 1988a: 43-50)。自伝ではカルナップやノイラートとのエピソードも紹介されているが、同様の印象を残している (Heider 1983a: 50, 92-93=1988: 49-50, 94-95)。
- 31) ハイダーが言及したギブソンによると思われるコメントは、アメリカ心理学会特別功労賞の授賞コメントとして残されている (American Psychological Association 1965: 1082)。
- 32) ハイダーは「知覚システムの遂行」(Heider 1930) に関しても、あらためて見直すと「不明瞭なスタイルで書かれて」いた気がするとし、そのせいもあって「少数の人にしか読まれなかった」のではないかと述べている (Heider 1983a: 88=1988: 91)。ただし、ブルンスヴィックからはこの論文が彼の理論の基礎として役に立たと1954年のアメリカ心理学会で言われたと付け加えている (cf. Brunswik 1952: 93 (note 20) = 1974: 138-139 (注20))。
- 33) ただし、この論文 (Heider 1939) の時点では帰属 (attribution) 概念を規定して用いていたわけではない。
- 34) 後年のインタビュー (Heider 1976: 4) では、事物知覚に関しても「帰属 (attribution)」の語を当てるようになっており、「物とメディア」についても「私がこうした問題〔事物知覚にお

- ける帰属過程の問題]を議論することを最初に試みたのは、1927年の論文『物とメディア』の中でした」として言及している。ハイダーの帰属概念の展開に関して、より詳しくは梅村(2018)を参照のこと。
- 35) 前掲ルーマンやベッカーが言及しているように、Weick (1976: 6, 1979: 166=1997: 216) は《ルースなカップリング》と《タイトなカップリング》の説明に際してハイダーの「物とメディア」を挙げている。ただし、『組織化の社会心理学』初版(1969)では、ハイダーに関して『対人関係の心理学』しか参照していない。
- 36) カッツはゲッティンゲン大学で心理学者ゲオルク・E・ミュラーに学び、知覚心理学の分野で特に色覚と触覚の研究で知られているが、フッサールからは知覚世界において物理的・心理的に与えられたものを「括弧に入れる」という現象学的な発想を取り入れたという (cf. MacLeod 1954)。またハイダーは上述の系譜でカッツの下に「児童画 (Kinderzeichnung)」と記しており (Heider 1988a: 128, § 330), ハイダーにはカッツの「児童画の知識に関する論考」(Katz 1906)をレビューして書いた「児童画と媒介理論」という未公開の草稿 (“Kinderzeichnung und Theorie der Vermittlung,” archived in: Heider 2005: Box 23, Folder 29: Talks, Drafts of Papers)がある。「感覚質の主観性について」では、『色の現象様式とそれに対する個人的経験の影響』(Katz 1911)を参照している (Heider 1920: 72-73, 78, 86)。ルビンはコペンハーゲン大学で学んだ後、ゲッティンゲン大学でカッツと同様ミュラーの下で指導を受け、そこで「ルビンの壺」として有名になる地と図に関する研究を行っている (cf. Rubin 1915=1921)。ハイダーは「物とメディア」で「地と図」という節を立て、そこでルビンの研究に言及している (Heider 1926: 152-154)。
- 37) Malle and Ickes (2000: 6) はそうした試みがハイダー以前の社会心理学ではレヴィンやソロモン・E・アッシュによって行われていたと付言している。ハイダーは『対人関係の心理学』でアッシュの『社会心理学』(Asch 1952: 128)の議論を引用する段で、アッシュの言葉として「相互に共有された環境 (mutually shared environment)」を挙げ、そこで現象学的社会学者アルフレート・シュッツの「多元的現実について」(Schuetz 1945: 534=1985: 11-12)を参照指示している (Heider 1958a: 61=1978: 75)。ハイダーは上記箇所の他に、シュッツからサルトルの他我理論の紹介と批判 (Schuetz 1948=1983)を引くだけであるが、シュッツもまた「常識的」構成概念と「科学的」構成概念との懸隔を問題化していた (cf. Schuetz 1953=1983)。ハイダーは常識心理学をそのまま学問的に扱うことはできず、体系的な言語で論じ直す必要があると考えていたが (cf. Heider 1958a: 9=1978: 11), シュッツは同様の構想を、日常生活の行為者による一次の構成概念に対する社会科学における「二次の構成概念 (constructs of the second degree)」として論じている (cf. Schutz 1954: 266-267, 269-270=1983: 122-123, 126-127; 梅村 2014: 76-79)。
- 38) ギブソンとバーカーの生態学的心理学については特にGibson (1950=2011, 1979=1985)とBarker (1960, 1965, 1968)を、またde Jong (1995)とHeft (2001)も参照。
- 39) レヴィンが1946年にハーバードで企画した社会心理学と社会的知覚の会議でも、ハイダーの社会的知覚に関する報告はレヴィンとバーカー以外から反応が何ら得られなかったという (Heider 1976: 11; Ickes and Harvey 1978: 166)。そのバーカーは『生態学的心理学』第6章「行動環境の理論」でハイダーの「物とメディア」英語版を挙げ、「われわれはここでハイダーによって35年以上前に書かれた特筆すべき論考にいくつかの手助けを見出すことができると思う。『物とメディア』と題されたこの論考の中で、ハイダーはサイバネティクスと情報理論の諸概念のいくつかを先取りし、特定の心理学的問題に応用している。その方法は、今日でも時代に先駆けたものと言える」と記している (Barker 1968: 159)。またギブソンは『視覚的世界の知覚』で「物とメディア」ドイツ語版をコフカの文献とともに、遠刺激(対象)と近刺激(網膜像)を区別する議論として参照している (Gibson 1950: 63=2011: 76)。
- 40) ハンブルク時代のエピソードとして、シュテルンから他の機関で若い心理学者を探していた友人を紹介されたとき、ハイダーは実験に基づく研究を公刊していないことの弁明として、「私は基礎概念を明晰にしたあとで初めて、実験に進むことが適切であると考えます」とその

人物宛ての手紙に記し、その後の返事はなかったという (Heider 1983a: 86-87=1988: 89)。ハイダーはインタビュー (Heider 1980: 15) でも「私にとって特に重要だったことの一つは、レヴィンが実際に哲学者エルンスト・カッシーラーから部分的に受け取った考えです。その考えとは、理論の中で扱う諸概念は、概念どうしの関係が実際に明晰であるように分析し確立する、というものです。扱う概念を明晰にすることなく経験的研究を行うことは実り多いことではありません。概念とはいわば私たちが物事について考える上での道具です。心理学のみならず、物理学や化学に関しても、歴史上多くの事例において、重要なブレークスルーは経験的調査からではなく、概念の分析からもたらされています」と話しており、アインシュタインの理論も実験ではなくニュートンの時空概念に関する理論的考察に由来するものであると強調している。レヴィンはマサチューセッツ工科大学時代にハイダーにも実験研究を勧めているが、ハイダーの側が断っている (Heider 1983a: 156-157=1988: 159-160)。

- 41) 特にウィーン育ちの母オイゲーニエは、有名になる前のグスタフ・クリムトから絵を教わっていたという (Heider 1983a: 4=1988: 5)。
- 42) ただしハイダーは認知的側面にとどまる単なる物の知覚と、価値判断に関わる美術鑑賞との違いを強調している (Heider 1983a: 69=1988: 69-70)。
- 43) マールはハイダーの感覚質の議論を、ジョン・ロックの第二性質 (物の固さや大きさなどの第一性質と対比される、色や音、臭いといったより主観的な感覚が作用するもの) の理論に関わるとしており、ハイダーはここに注目しなかったために美学理論を展開することがなかったと見ている (Mahr 2010b: 61)。ただし、ハイダーが依拠したマイノング『われわれの知識の経験的基礎について』では、感覚質との関わりでロックの第二性質の議論が取り上げられている (Meinong 1906: 41-46)。
- 44) 「感覚質の主観性について」は現在、提出版がグラーツ大学附属図書館に所蔵されており、複写版2冊がカンザス大学のフリッツ・ハイダー・コレクションに収蔵されている (cf. Heider 1920)。

45) マイノングの「傾性」概念 (cf. Mulligan 2003) について、ハイダーは Meinong (1919) を参照指示している。

46) Meinong (1906) の目次ですでに、6節「知覚の明証性」、10節「疑似存在と疑似客体」、19節「物と現象 (Ding und Erscheinung)」, 22節「相違の優先と知覚フォーラム (Wahrnehmungsforum)」, 23節「転位可能な上位者。高次のフェノメーン (Phänomene höherer Ordnung)」など、ハイダーが学位論文で用いた諸概念が登場している。

文献

- American Psychological Association, 1965, "Distinguished Scientific Contribution Awards 1965: Fritz Heider," in: *American Psychologist*, 20(12): 1082-1084.
- Baecker, Dirk, 2004, » Vorwort «, in: Fritz Heider, *Ding und Medium*, hrsg. und mit einem Vorwort versehen von Dirk Baecker, Berlin: Kulturverlag Kadmos, 7-20.
- Barker, Roger G., 1960, "Ecology and Motivation," in: *Nebraska Symposium on Motivation*, 8: 1-49.
- Barker, Roger G., 1965, "Explorations in Ecological Psychology," in: *American Psychologist*, 20(1): 1-14.
- Barker, Roger G., 1968, *Ecological Psychology: Concepts and Methods for Studying the Environment of Human Behavior*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Benesh-Weiner, Marijana, 1987, "Editor's Introduction," in: Heider 1987: xxiv-xxxix.
- Benesh-Weiner, Marijana, 1990, "In Memory," in: Heider 1990: xv-xxi.
- Benesh, Marijana and Bernard Weiner, 1982, "On Emotion and Motivation: From the Notebooks of Fritz Heider," in: *American Psychologist*, 37(8): 887-895.
- Brunswik, Egon, 1934, *Wahrnehmung und Gegenstandswelt: Grundlegung einer Psychologie vom Gegenstand her*, Leipzig und Wien: Franz Deuticke.
- Brunswik, Egon, 1952, *The Conceptual Framework of Psychology*, International Encyclopedia of Unified Science, Volumes I and II, Foundations of the Unity of Science, Volume I, Number 10, Chicago: The University of Chicago Press. (=1974, 船津孝行訳『心理学の枠組み——その概念・歴史・方法』)

- 誠信書房.)
- Campbell, Donald T., 1966, "Pattern Matching as an Essential in Distal Knowing," in: Hammond (ed.), 1966: 81-106.
- Cartwright, Dorwin P. and Harold H. Kelley, 1987, "Fritz Heider: An Appreciation of His Book, His Influence, and His Notes," in: Heider 1987: XIII-XXXVII.
- Court, Jürgen, 2003, » Wilhelm Benary als Verleger der Gestaltpsychologie «, in: *Gestalt Theory*, 25(4): 307-317.
- Court, Jürgen und Jan-Peters Janssen, 2003, *Wilhelm Benary (1888-1955). Leben und Werk*, Psychology Science, 45, Supplement 4, Lengerich, Westfalen: Pabst Science Publishers.
- de Jong, Huib Looren, 1995, "Ecological Psychology and Naturalism: Heider, Gibson and Marr," in: *Theory and Psychology*, 5(2): 251-269.
- Duncan, Carl P., 1984, "Review: The Life of a Psychologist: An Autobiography by Fritz Heider," in: *The American Journal of Psychology*, 97(2): 309-312.
- Gibson, James J., 1950, *The Perception of the Visual World*, Boston: Houghton Mifflin. (= 2011, 東山篤規・竹澤智美・村上高至訳『視覚ワールドの知覚』新曜社.)
- Gibson, James J., 1979, *The Ecological Approach to Visual Perception*, Boston: Houghton Mifflin. (= 1985, 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社.)
- Golomb, Claire, 2012, "Marianne L. Simmel (1923-2010)," in: *American Psychologist*, 67(2): 162.
- Gordon, Andrew S. and Melissa Roemmele, 2014, "An Authoring Tool for Movies in the Style of Heider and Simmel," in: Alex Mitchell, Clara Fernández-Vara, and David Thue (eds.), *Interactive Storytelling, 7th International Conference on Interactive Digital Storytelling (ICIDS 2014, held at Singapore, November 3-6, 2014)*, *Proceedings*, Cham: Springer International Publishing Switzerland, 49-60.
- Görlitz, Dietmar, 2004, » Vorbemerkungen «, in: Fritz Heider, *Das Leben eines Psychologen: Eine Autobiographie*, übersetzt von Agnes von Cranach, mit einführende Vorbemerkungen von Dietmar Görlitz, Weinheim und Basel: Beltz, 1-6.
- Görlitz, Dietmar, Wulf-Uwe Meyer und Bernard Weiner (Hg.), 1978, *Bielefelder Symposium über Attribution*, Beiträge zum Symposium über Attribution, Zentrum für interdisziplinäre Forschung der Universität Bielefeld, 28-30. Juni 1977, Stuttgart: Clett-Cotta, 19-28.
- Hammond, Kenneth R. (ed.), 1966, *The Psychology of Egon Brunswik*, New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Harvey, John, 1989, "Fritz Heider," in: *American Psychologist*, 44(3): 570-571.
- Heft, Harry, 2001, *Ecological Psychology in Context: James Gibson, Roger Barker, and the Legacy of William James's Radical Empiricism*, Mahwah, New Jersey and London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Heider, Fritz, 1920, *Zur Subjektivität der Sinnesqualitäten, Unpublizierte Dissertation*, Karl-Franzens-Universität Graz, 80 S. (Archiviert in: Universitätsbibliothek Graz, II 250602/BM27196908, transcription in: Heider 2005: Box 23, Folder 31: Dissertation, 1920, Box 38, Folder 4: Fritz 1 – Dissertation.)
- Heider, Fritz, 1926, » Ding und Medium «, in: *Symposium: Philosophische Zeitschrift für Forschung und Aussprache*, 1(2): 109-157. (= 1959, "Thing and Medium," translated in English and shortened, in: Heider 1959a: 1-34; Republiziert vom deutsche Original in 2004, hrsg. und mit einem Vorwort versehen von Dirk Baecker, Berlin: Kulturverlag.)
- Heider, Fritz, 1930, » Die Leistung des Wahrnehmungssystems «, in: *Zeitschrift für Psychologie*, 114: 371-394. (= 1959, "The Function of the Perceptual System," in: Heider 1959a: 35-52.)
- Heider, Fritz, 1933, "Remarks on the Brightness Paradox Described by Metzger," in: *Psychologische Forschung*, 16: 121-129.
- Heider, Fritz, 1934, "The Influence of the Epidemic of 1918 on Deafness: A Study of Birth Dates of Pupils Registered in Schools for the Deaf," in: *American Journal of Hygiene*, 19: 756-762.
- Heider, Fritz, 1939, "Environmental Determinants of Psychological Theories," in: *Psychological Review*, 46: 383-410. (Reprinted in: Heider 1959a: 61-84.)
- Heider, Fritz, 1941, "The Description of the Psychological Environment in the Work of Marcel Proust," in: *Journal of Personality*, 9(4): 295-314. (Reprinted

- in: Heider 1959a: 85-107.)
- Heider, Fritz, 1942, "Surprise and Ambiguity," in: *Smith College Monthly*, 3: 6-7.
- Heider, Fritz, 1943, "Acoustic Training Helps Lip-Reading," in: *Volta Review*, 45: 135, 180.
- Heider, Fritz, 1944, "Social Perception and Phenomenal Causality," in: *Psychological Review*, 51: 358-374. (Reprinted in: Tagiuri and Petrullo (eds.) 1958: 1-21 = 1969, » Soziale Wahrnehmung und Phänomenale Kausalität «, übersetzt von Agnes von Cranach, in: Martin Irle (Hg.), *Texte aus der experimentellen Sozialpsychologie*, Neuwied, Rheinland-Pfalz: Luchterhand, 26-56.)
- Heider, Fritz, 1946, "Attitudes and Cognitive Organization," in: *The Journal of Psychology*, 21: 107-112.
- Heider, Fritz, 1947, "Michotte, A. *La perception de la causalité*," in: *Psychological Bulletin*, American Psychological Association, 44(6): 585-586.
- Heider, Fritz, [1954] 1955, "Consciousness, the Perceptual World, and Interaction with Others," in: *Proceedings of the Fourteenth International Congress of Psychology*, International Union of Scientific Psychology, Montreal, June 1954, Amsterdam: North-Holland, 159.
- Heider, Fritz, 1957, "Trends in Cognitive Theory," in: Jerome S. Bruner, Egon Brunswik, Leon Festinger, Fritz Heider, Karl F. Muenzinger, Charles E. Osgood, and David Rapaport (eds.), *Contemporary Approaches to Cognition: A Symposium Held at the University of Colorado*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 201-210.
- Heider, Fritz, 1958a, *Psychology of Interpersonal Relations*, New York: Wiley. (= 大橋正夫訳, 1978『対人関係の心理学』誠信書房.)
- Heider, Fritz, [1954] 1958b, "Consciousness, the Perceptual World, and Communications with Others," in: Renato Tagiuri and Luigi Petrullo (eds.) 1958: 27-32. (First presented in: Symposium on "Consciousness: Revised and Revived" at the International Congress of Psychology, Montreal 1954.)
- Heider, Fritz, [1954] 1958c, "Perceiving the Other Person," in: Tagiuri and Petrullo (eds.) 1958: 22-26. (First presented in: Symposium on "Theory and Research in Interpersonal Perception" at the meeting of the American Psychological Association, New York 1954.)
- Heider, Fritz, 1959a, "On Perception, Event Structure and Psychological Environment. Selected Papers," in: *Psychological Issues*, 1(3): 1-123.
- Heider, Fritz, 1959b, "The Function of Economical Description in Perception," in: Heider 1959a: 53-60.
- Heider, Fritz, [1959] 1960a, "On Lewin's Method and Theory," in: *Journal of Social Issues*, 15 (Supplement 13): 3-13. (First presented in: Kurt Levin Memorial Award at the meeting of the American Psychological Association, Cincinnati 1959; First published in: Heider 1959a: 108-119.)
- Heider, Fritz, [1959] 1960b, "On the Reduction of Sentiment," in: Sidney Hook (ed.), *Dimensions of Mind: A Symposium*, Proceedings of the third annual New York University Institute of Philosophy, held at Washington Square, New York, May 15-16, 1959, Washington Square, New York: New York University Press, 198-201.
- Heider, Fritz, 1960c, "The Gestalt Theory of Motivation," in: *Nebraska Symposium on Motivation*, 8: 145-172.
- Heider, Fritz, 1960d, "Comments on Dr. White's Paper [Robert W. White, "Competence and the Psychosexual Stages of Development"]," in: *Nebraska Symposium on Motivation*, 8: 141-143.
- Heider Fritz, 1960e, "Comments on Dr. Rapaport's Paper [David Rapaport, "On the Psychoanalytic Theory of Motivation]," in: *Nebraska Symposium on Motivation*, 8: 253-257.
- Heider, Fritz [1960] 1962, "The Other Person: How We Perceive It," in: *Proceedings of the Sixteenth International Congress of Psychology*, International Union of Scientific Psychology, Bonn, July 31-August 6, 1960, Amsterdam: North-Holland, 564-565.
- Heider, Fritz, 1963, "Opinions from the Hill," in: *Lawrence Daily Journal-World*, a series of article written by KU faculty members, Lawrence, Kansas: University of Kansas, November 18, 1963.
- Heider, Fritz, [1962] 1964, "Martin Scheerer," in: Constance Scheerer (ed.), *Cognition: Theory, Research and Promise*, Papers read at the Martin Sheerer Memorial Meetings on Cognitive Psychology, University of Kansas, May 1962, New York: Harper and Row, 1962, 1-5.

- Heider, Fritz, [1958] 1966, "Personal and Impersonal Causality," in: Hammond (ed.), 1966: 149-158. (Originally published in: Heider, 1958a: 100-109 = 1978: 125-136.)
- Heider, Fritz, 1967, "On Social Cognition," in: *American Psychologist*, 22(1): 25-31.
- Heider, Fritz, [1968] 1970, "Gestalt Theory: Early History and Reminiscences," in: *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 6: 131-139. (First presented in: Division of the History of Psychology at the annual meeting of the American Psychological Association, September 1, 1968.)
- Heider, Fritz, 1976, "A Conversation with Fritz Heider," in: John H. Harvey, William John Ickes and Robert F. Kidd (eds.), *New Directions in Attribution Research*, Vol.1, Hillsdale, New Jersey: L. Erlbaum Associates, 3-18.
- Heider, Fritz, 1977, "Balance Theory," in: Benjamin B. Wolman (ed.), *International Encyclopedia of Psychiatry, Psychology, Psychoanalysis, and Neurology*, Vol.2: Am-By, New York: Produced for Aesculapius Publishers by Van Nostrand Reinhold, 277-279.
- Heider, Fritz, [1976] 1978a, "Preface for the Japanese Translation of the Psychology of Interpersonal Relations," Lawrence, Kansas, October 17, 1976, archived in: Heider 2005: Box 23, Folder 29: Talks, Drafts of Papers. (= 1978, 大橋正夫訳「日本語版への著者緒言」『対人関係の心理学』誠信書房, i-ii.)
- Heider, Fritz, [1977] 1978b, » Wahrnehmung und Attribution«, in: Görlitz et al. (Hg.) 1978: 13-18.
- Heider, Fritz, [1975] 1979, "On Balance and Attribution," in: Paul W. Holland and Samuel Leinhardt (eds.), *Perspectives on Social Network Research*, Papers prepared for presentation at the Mathematical Social Science Board's Advanced Research Symposium on Social Networks, Dartmouth College, Hanover, New Hampshire, September 18-21, 1975, New York: Academic Press, 11-23. (Deutsche Übersetzung von Daniele Paul, 1978, » Über Balance und Attribution«, in: Görlitz et al. (Hg.) 1978: 19-28.)
- Heider, Fritz, 1980, "Fritz Heider [: Conversation with Richard I. Evans]," in: Richard I. Evans (ed.), *The Making of Social Psychology: Discussions with Creative Contributors*, New York: Gardner, 13-24.
- Heider, Fritz, 1983a, *The Life of a Psychologist: An Autobiography*, Lawrence, Kansas: The University Press of Kansas. (= 1984, übersetzt von Agnes von Cranach, mit einführende Vorbemerkungen von Dietmar Görlitz, *Das Leben eines Psychologen: Eine Autobiographie*, Bern: Hans Huber; 1988, 堀端孝治訳『ある心理学者の生涯——現代心理学史の一側面を歩んだハイダーの自叙伝』協同出版.)
- Heider, Fritz, 1983b, "A Conversation with Fritz Heider," in: Andrew B. Crider, George R. Goethals, Robert D. Kavanaugh, Paul R. Solomon, *Psychology*, Glonview, Illinois: Scott Foresman, 420-421.
- Heider, Fritz, 1987, *The Notebooks*, Vol.1, *Methods, Principles, and Philosophy of Science*, edited by Marijana Benesh-Weiner, München and Weinheim: Psychologie Verlags Union.
- Heider, Fritz, 1988a, *The Notebooks*, Vol.2, *Perception*, edited by Marijana Benesh-Weiner, München and Weinheim: Psychologie Verlags Union.
- Heider, Fritz, 1988b, *The Notebooks*, Vol.3, *Motivation*, edited by Marijana Benesh-Weiner, München and Weinheim: Psychologie Verlags Union.
- Heider, Fritz, 1988c, *The Notebooks*, Vol.4, *Balance Theory*, edited by Marijana Benesh-Weiner, München and Weinheim: Psychologie Verlags Union.
- Heider, Fritz, 1988d, *The Notebooks*, Vol.5, *Attributional and Interpersonal Evaluation*, edited by Marijana Benesh-Weiner, München and Weinheim: Psychologie Verlags Union.
- Heider, Fritz, 1989, "Fritz Heider," in: Gardner Lindzey (ed.), *A History of Psychology in Autobiography*, Vol. 8, Stanford, California: Stanford University Press, 127-156. (= 1983, » Einführung als Autobiographie«, übergesetzt von Dietmar Görlitz und David Antal nach dem Manuskript Heiders, in: Dietmar Görlitz (Hg.), *Kindliche Erklärungsmuster, Entwicklungspsychologische Beiträge zur Attributionsforschung*, Band 1, Weinheim und Basel: Beltz, 17-45.)
- Heider, Fritz, 1990, *The Notebooks*, Vol.6, *Units and Coinciding Units*, edited by Marijana Benesh-Weiner, München and Weinheim: Psychologie Verlags Union.
- Heider, Fritz, 2005, *Personal Papers of Fritz Heider, 1907-1983*, Lawrence, Kansas: Kenneth Spencer Research Library, University of Kansas Libraries. (Collection summary: <http://etext.ku.edu/view?docId=>

- ksrlead/ksrl.ua.heiderfritz.xml)
- Heider, Fritz and Grace Moore Heider, 1940, "Studies in the Psychology of the Deaf (Vol.1)," in: *Psychological Monographs*, 52(1), Evanston, Illinois: The American Psychological Association.
- Heider, Fritz and Grace Moore Heider, 1941a, "Studies in the Psychology of the Deaf (Vol.2)," in: *Psychological Monographs*, 53(5), Evanston, Illinois: The American Psychological Association.
- Heider, Fritz and Grace Moore Heider, 1941b, "The Thinking of the Young Deaf Children as Shown in Sorting Experiments," in: *Volta Review*, 43(2): 111-113, 146.
- Heider, Fritz and Grace Moore Heider, 1941c, "Phonetic Symbolism of Deaf Children," in: *Volta Review*, 43(3): 165-168, 43(4): 233-236.
- Heider, Fritz and Grace Moore Heider, 1941d, "A Comparison of Sentence Structure of Deaf and Hearing Children," in: *Volta Review*, 43(6): 364-367, 406, 43(9): 536-540, 564, 43(10): 599-604, 628-630.
- Heider, Fritz and Grace Moore Heider, 1943a, "Studies on Preschool Deaf Children," in: *Volta Review*, 45(5): 261-267.
- Heider, Fritz and Grace Moore Heider, 1943b, "The Adjustment of the Adult Deaf: 1. Comments from the Deaf about After-School Problems," in: *Volta Review*, 45(6): 325-328, 380-382.
- Heider, Fritz and Grace Moore Heider, 1943c, "The Adjustment of the Adult Deaf: 2. After-School Problems as the Psychologist Sees Them," in: *Volta Review*, 45(7): 389-391, 430.
- Heider, Fritz and Grace Moore Heider, 1943d, "Deafness," in: Ralph B. Winn (ed.), *Encyclopedia of Child Guidance*, New York: Philosophical Library, 100-104.
- Heider, Fritz, Grace Moore Heider, and Jean L Sykes, 1941, "A Study of the Spontaneous Vocalizations of Fourteen Deaf Children," in: *Volta Review*, 43(1): 10-14.
- Heider, Fritz and Marianne Simmel, 1944, "An Experimental Study of Apparent Behavior," in: *American Journal of Psychology*, 57: 243-259.
- Heider, Grace Moore and Fritz Heider, 1935, "Motion Pictures in Classroom Work," in: *Volta Review*, 37(2): 71-75.
- Heider, Grace Moore, 2011, *Personal Papers of Grace Heider, 1931-1994*, Lawrence, Kansas: Kenneth Spencer Research Library, University of Kansas Libraries, University Archives PP 485. (Collection summary: <http://etext.ku.edu/view?docId=ksrlead/ksrl.ua.heidergrace.xml>)
- Huber, Helmuth P., 2007, » Die Grazer Schule der Psychologie um Meinong «, in: Karl Acham (Hg.), *Naturwissenschaften, Medizin und Technik aus Graz. Entdeckungen und Erfindungen aus fünf Jahrhunderten: vom »Mysterium cosmographicum« bis zur direkten Hirn-Computer-Kommunikation*, Wien/Köln/Weimar: Böhlau Verlag, 375-396.
- Ickes, William and John H. Harvey, 1978, "Fritz Heider: A Biographical Sketch," in: *The Journal of Psychology*, 98: 159-170.
- Jones, Edward E. and Keith E. Davis, 1965, "From Acts to Dispositions: The Attribution Process in Person Perception," in: Leonard Berkowitz (ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol.2, New York and London, 219-266.
- Jones, Edward E., David E. Kanouse, Harold H. Kelley, Richard E. Nisbett, Stuart Valins and Bernard Weiner, 1971, *Attribution: Perceiving the Causes of Behavior*, Morristown, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Kaesler, Dirk, 2010, » Simmel, Georg «, in: *Neue Deutsche Biographie*, 24: 421-422.
- Katz, David, 1906, » Ein Beitrag zur Kenntnis der Kinderzeichnungen «, in: *Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinnesorgane*, 1. Abteilung, *Zeitschrift für Psychologie*, 41: 241-256.
- Katz, David, 1911, *Die Erscheinungsweisen der Farben und ihre Beeinflussung durch die individuelle Erfahrung*, *Zeitschrift für Psychologie*, Ergänzungsband 7, Leipzig: Johann Ambrosius Barth.
- Katz, David, 1951, "Edgar Rubin 1886-1951," in: *The Psychological Review*, 58(6): 387-388.
- Kelley, Harold H., 1960, "The Analysis of Common Sense. Fritz Heider, *The Psychology of Interpersonal Relations*," in: *Contemporary Psychology: A Journal of Reviews*, 5(1): 1-3.
- Kelley, Harold H., 1967, "Attribution Theory in Social Psychology," in: *Nebraska Symposium on Motivation*, 15: 192-238.

- Kelley, Harold H., 1984, "The Impractical Theorist. Fritz Heider, The Life of Psychologists," in: *Contemporary Psychology: A Journal of Reviews*, 29(6): 455-456.
- Klein, George S., 1959, "A Note to the Reader," in: Heider 1959a: v-vii.
- Lehmann, Gertraud, 2002, » Philosophische Akademie zu Erlangen «, in: Friedrich, Christoph et al. (Hg.), *Erlanger Stadlexikon*, Nürnberg: Tümmels, 555-556. (Stadtarchiv Erlangen, Stadlexikon Erlangen online, Retrieved April 2, 2018, <http://stadtarchiv-erlangen.iserver-online2.de/nav.FAU?sid=B2F4F6F938&dm=1&erg=H&npos=1>)
- Levin, Kurt, 1936, *Principles of Topological Psychology*, translated by Fritz Heider and Grace Moore Heider, New York: Mcgraw-Hill. (=1942, 外林大作・松村康平訳『トポロジー心理学の原理』生活社.)
- Lück, Helmut E., 2006, » Die Heider-Simmel-Studie (1944) in neueren Replikationen «, in: *Gruppendynamik und Organisationsberatung*, 37(2): 185-196.
- Luhmann, Niklas, 1965, *Grundrechte als Institution: Ein Beitrag zur politischen Soziologie*, Berlin: Duncker & Humblot. (=1989, 今井弘道・大野達司訳『制度としての基本権』木鐸社.)
- Luhmann, Niklas, 1973, » Zurechnung von Beförderung im öffentlichen Dienst «, in: *Zeitschrift für Soziologie*, 2(4): 326-351.
- Luhmann, Niklas, 1976, "Generalized Media and the Problem of Contingency," in: Jan J. Loubser, Rainer C. Baum, Andrew Effrat and Victor Meyer Litz (eds.), *Explorations in General Theory in Social Science: Essay in Honor of Talcott Parsons*, Vol. 2, New York: The Free Press, 507-532.
- Luhmann, Niklas, 1978, » Erleben und Handeln «, in: Hans Lenk (Hg.), *Handlungstheorien - interdisziplinär*, Bd. 2, 1. Halbbd.: *Handlungserklärungen und philosophische Handlungsinterpretation*, München: W. Fink, 235-253.
- Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1993-1995, 佐藤勉監訳『社会システム理論』恒星社厚生閣.)
- Luhmann, Niklas, 1988, *Erkenntnis als Konstruktion*, Bern: Benteli. (=1996, 土方透・松戸行雄訳「構成としての認識」『ルーマン, 学問と自身を語る』新泉社, 223-256.)
- Luhmann, Niklas, 1995, *Die Kunst der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2004, 馬場靖雄訳『社会の芸術』法政大学出版局.)
- Luhmann, Niklas, 1997a, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, 1-2, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2009, 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会』1-2, 法政大学出版局.)
- Luhmann, Niklas, 1997b, » Das Medium der Religion: Eine soziologische Betrachtung über Gott und die Seelen «, in: *Evangelische Theologie*, 57(4): 305-318.
- Luhmann, Niklas, 2000, *Die Religion der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2016, 土方透・森川剛光・渡會知子・畠中茉莉子訳『社会の宗教』法政大学出版局.)
- Luhmann, Niklas, [1986] 2001, » Das Medium der Kunst «, in: *Aufsätze und Reden*, hrsg. von Oliver Jahraus, Stuttgart: Philipp Reclam, 198-217. (= [1996] 2016, 土方透・大澤善信訳「芸術というメディア」『自己言及性について』筑摩書房, 264-286, 357-359.)
- Luhmann, Niklas, [1992-93] 2005, *Einführung in die Theorie der Gesellschaft*, hrsg. von Dirk Baecker, Heidelberg: Carl-Auer-Systeme. (=2009, デイルク・ベッカー編, 土方透監訳『社会理論入門—ニクラス・ルーマン講義録2』新泉社.)
- Luhmann, Niklas und Renate Mayntz, 1973, *Personal im öffentlichen Dienst: Eintritt und Karrieren. Personaluntersuchung*, Studienkommission für die Reform des öffentlichen Dienstrechts, Band 7, unter Mitarbeit von Rainer Koch und Elmar Lange, Baden-Baden: Nomos Verlagsgesellschaft.
- MacLeod, Robert B., 1954, "David Katz 1884-1953," in: *The Psychological Review*, 61(1): 1-4.
- Mahr, Peter, 2010a, » Meinong, Witäsek, Heider: Ist gegenstandstheoretische Ästhetik möglich? «, in: *The Aesthetics of the Graz School, Meinong Studies*, 4: 191-216.
- Mahr, Peter, 2010b, » Niklas Luhmanns Kunsttheorie in ihrem Bezug zu Fritz Heiders Dingtheorie: Ein Beitrag zur Medienästhetik «, in: Christian Filk und Holger Simon (Hg.), *Kunstkommunikation*, Berlin: Kadmos, 55-78. (=2018, 梅村麦生訳「ニクラス・

- ルーマンの芸術理論とフリッツ・ハイダーの物理論の関わり——メディア美学論考』『社会学雑誌』34: 168-195.)
- Malle, Bertram F., 2008, "Fritz Heider's Legacy Celebrated Insights, Many of Them Misunderstood," in: *Social Psychology*, 39(3): 163-173.
- Malle, Bertram F., 2011, "Attribution Theories: How People Make Sense of Behavior," in: Derek Chadee (ed.), *Theories in Social Psychology*, Chichester: Wiley-Blackwell, 72-95.
- Malle, Bertram F. and William Ickes, 2000, "Fritz Heider: Philosopher and Psychologist," in: G. A. Kimble and M. Wertheimer (eds.), *Portraits of Pioneers in Psychology*, Vol.4, Washington, D. C.: American Psychological Association, 195-214.
- Mandler, Jean Matter and George Mandler, 1969, "The Diaspora of Experimental Psychology: The Gestaltists and Others," in: Donald Fleming and Bernard Bailyn (eds.), *The Intellectual Migration: Europe and America, 1930-1960*, Massachusetts: Harvard University Press, 371-419. (=1973, 近藤邦夫訳「実験心理学におけるディアスポラ——ゲシュタルト主義者を中心に」荒川幾男ほか訳『知識人の大移動2 社会学者・心理学者』みすず書房, 77-141.)
- Marrow, Alfred Jay, 1969, *The Practical Theorist: The Life and Work of Kurt Lewin*, New York and London: Basic Books. (=1972, 望月衛・宇津木保訳『KURT LEWIN——その生涯と業績』誠信書房.)
- Meinong, Alexius, 1906, *Über die Erfahrungsgrundlagen unseres Wissens, Nachdruck aus den Abhandlungen zur Didaktik und Philosophie der Naturwissenschaft*, Band I, Heft 6, Berlin: Julius Springer. (Republiziert in: 1973, *Alexius Meinong Gesamtausgabe*, hrsg. von Rudolf Haller und Rudolf Kindinger, Band V, bearbeitet von Roderick M. Chisholm, Graz: Akademische Druck und Verlagsanstalt, 367-491.)
- Meinong, Alexius, 1919, » Allgemeines zur Lehre von den Dispositionen «, in: Alexius Meinong (Hg.), *Beiträge zur Pädagogik und Dispositionstheorie. Eduard Martinak zur Feier seines 60. Geburtstages dargebracht von Fachgenossen, Schülern und Freunden*, Praha, Wien und Leipzig: Hasse, 33-54. (Republiziert in: 1978, *Alexius Meinong Gesamtausgabe*, hrsg. von Rudolf Haller und Rudolf Kindinger, Band VII, bearbeitet von Rudolf Haller, Graz: Akademische Druck- und Verlagsanstalt, 287-310.)
- Mulligan, Kevin, 2003, "Dispositions, their Bases and Correlates: Meinong's Analysis," in: Jaako Hintikka, Tadeusz Czarnecki, Katarzyna Kijania-Placek, Tomasz Placek and Artur Rojszczak (eds.), *Philosophy and Logic in Search of the Polish Tradition: Essays in Honour of Jan Woleński on the Occasion of his 60th Birthday*, Dordrecht, Boston, and London: Kluwer, 193-211.
- Neurath, Otto, 1937, "Unified Science and Its Encyclopaedia," in: *Philosophy of Science*, 4(2): 265-277. (Reprinted in: Otto Neurath, 1983, *Philosophical Papers 1913-1946*, Dordrecht, Boston and Lancaster: D. Reidel, 172-182.)
- Rappoport, Leon, 1985, "Scholarly Creativity and the Poetry of Human Development: The Life of Fritz Heider," in: *Human Development*, 28: 131-140.
- Reisenzein, Rainer and Irina Mchitarjan, 2008, "'The Teacher Who Had the Greatest Influence on My Thinking.' Tracing Meinong's Influence on Heider," in: *Social Psychology*, 39(3): 141-150.
- Reisenzein, Rainer and Udo Rudolph, 2008, "The Discovery of Common-Sense Psychology," in: *Social Psychology*, 39(4): 125-133.
- Reisch, George, 1996, "Terminology in Action: Neurath and the *International Encyclopedia of Unified Science*," in: Elisabeth Nemeth and Friedrich Stadler (eds.), *Encyclopedia and Utopia: The Life and Work of Otto Neurath (1882-1945)*, Dordrecht, Boston and London: Kluwer, 79-86.
- Ryckman, Thomas A., 1991, "Conditio sine qua non? Zuordnung in the Early Epistemologies of Cassirer and Schlick," in: *Synthese: An International Journal for Epistemology, Methodology and Philosophy of Science*, 88(1): 57-95.
- Rubin, Edgar, 1915, *Synsoplevede Figurer : Studier i psykologisk Analyse*, København : Gyldendalske Boghandel. (= 1921, *Visuelt wahrgenommene Figurer: Studier i psykologisk Analyse*, København: Gyldendalske Boghandel.)
- Rudolph, Udo und Rainer Reisenzein, 2008, "50 Years of Attribution Research," in: *Social Psychology*, 39(3), Special Issue: 50 Years of Attribution Research, 123-124.

- Ruess, Susanne, 2009, *Stuttgarter jüdische Ärzte während des Nationalsozialismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann.
- Schönflug, Wolfgang, 2008, "Fritz Heider—My Academic Teacher and His Academic Teachers," *Social Psychology*, 39(3): 134-140.
- Snyder, C. R., 1988, "Attributions and the Heider Legacy," in: *Journal of Social and Clinical Psychology*, 7(2-3): i-iv.
- Schuetz, Alfred, 1945, "On Multiple Realities," in: *Philosophy and Phenomenological Research*, 5(4): 533-576. (Reprinted in: Schutz 1962: 207-259 = 1985, 那須壽訳「多元的現実について」, 9-80.)
- Schuetz, Alfred, 1948, "Sartre's Theory of the Alter Ego," in: *Philosophy and Phenomenological Research*, 9(2): 181-199. (Reprinted in: Schutz 1962: 180-203 = 1983, 渡部光訳「サルトルの他我理論」, 279-310.)
- Schuetz, Alfred, 1953, "Common-Sense and Scientific Interpretation of Human Action," in: *Philosophy and Phenomenological Research*, 14(1): 1-38. (Reprinted in: Schutz 1962: 3-47 = 1983, 那須壽訳「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」, 49-108.)
- Schutz, Alfred, [1953] 1954, "Concept and Theory Formation in the Social Sciences," in: *Journal of Philosophy*, 51(9): 257-273. (Reprinted in: Schutz 1962: 48-66 = 1983, 那須壽訳「社会科学における概念構成と理論構成」, 109-133.)
- Schutz, Alfred, 1962, *Collected Papers*, Volume I, edited and introduced by Maurice Natanson, with a preface by H. L. Van Breda, Den Haag, Boston and London: Martinus Nijhoff. (=1983/1985, モーリス・ナタンソン編『アルフレッド・シュッツ著作集』第1・2巻, 渡部光・那須壽・西原和久訳, マルジュ社.)
- Shannon, Claude E. and Warren Weaver, 1949, *The Mathematical Theory of Communication*, Urbana: University of Illinois Press. (=2009, 植松友彦訳『通信の数学的理論』筑摩書房.)
- 柴田崇, 2012, 「ハイダーとギブソンのメディアウム概念」『生態心理学研究』5(1): 15-28.
- Tagiuri, Renato and Luigi Petrullo (eds.), 1958, *Person Perception and Interpersonal Behavior*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Tolman, Edward C., 1956, "Egon Brunswik: 1903-1955," in: *The American Journal of Psychology*, 69(2): 315-324.
- 梅村麦生, 2014, 「A・シュッツの多元的『構成』論——Aufbau, Konstitution, Konstruktion」『ソシオロジ』58(3): 67-83.
- 梅村麦生, 2018, 「F・ハイダーの帰属概念——20世紀の科学方法論の二つの帰属をめぐって」『社会学史研究』40: 93-111.
- Verein Ernst Mach (Hg.), 1929, *Wissenschaftliche Weltanschauung: Der Wiener Kreis*, Wien: Artur Wolf. (=1990, 寺中平治訳「科学的世界把握——ウィーン学団」ヴィクトル・クラフト『ウィーン学団——論理実証主義の起源・現代哲学史への一章』勁草書房, 217-252.)
- Weary, Gifford, Marvina C. Rich, John H Harvey, and William J. Ickes, 1980, "Heider's Formulation of Social Perception and Attributional Processes: Toward Further Clarification," in: *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6(1): 37-43.
- Weick, Karl E., 1976, "Educational Organizations as Loosely Coupled Systems," in: *Administrative Science Quarterly*, 21(1): 1-19.
- Weick, Karl E., 1979, *The Social Psychology of Organizing*, 2nd ed. (1st ed., 1969), Reading, Massachusetts: Addison-Wisley. (=1997, 遠田雄志訳『組織化の社会心理学(第2版)』文真堂.)
- Weiner, Bernard, 2015, "Heider, Fritz (1896–1988)," in: James D. Wright (ed.), *International Encyclopedia of the Social and Behavioral Sciences*, Vol. 10: Geno-Hir, 2nd ed., Amsterdam: Elsevier, 750-754.
- Wieser, Martin, 2014, "Remembering the 'Lens': Visual Transformations of a Concept from Heider to Brunswik," in: *History of Psychology*, 17(2): 83-104.
- Wolf, Bernhard, [2003] 2004, "Fritz Heider and Egon Brunswik, Their Lens Models: Origins, Similarities, Discrepancies," in: *Brunswik Society Notes and Essays*, 4, Paper delivered at the Brunswik Society Meeting, Vancouver, British Columbia, Canada November 6-7, 2003, (Retrieved July 27, 2016, <http://www.brunswik.org/notes/HeiderBrunswik-Wolf2003.pdf>)

付記

本稿はJSPS科研費16K17232の助成を受けた研究成果の一部である。